

Mosaic Art 棹

Light Sufuruf



井々歟憂^{いよいよ}は5時27分に起きてコーヒを淹れ、トーストしたパンを食み、昨晚、アイロンしておいたターンブル&アッサーのワイシャツの袖に腕を通した。紋織タイを締め、スーツを羽織ると、まだ眠っている娘や妻を後にし、玄関から出る。外は寒い霧雨の11月2日であつた。スウエイン・アドニー・ブリッグの傘を持つ。ハンドルはトネリコだ。

チャーチのモンク靴（ストラップとバックルで締める靴。モンクストラップ・シュー。15世紀にアルプス地域にいた修道士が履いていたサンダルが原型で、「修道士」を意味するMook（英）が名の由来）に、ベツカリ―皮革（アメリカ大陸に棲む野生の豚ベツカリ―から作る革皮は革質が丈夫

で、摩擦に強く、柔らかい。ワシントン条約付属書Ⅱ・取引に厳重な規制を要し、輸出許可書が必要）の古い手袋、そしてバーバリのレインコートという出で立ちであつた。

住宅地の狭い舗装路を行く。最近自家を普請し転居して来た彼は近所の造りや構えを見るのが好きだ。姥目櫨の生垣の家や大練塀のような塀の家、赤煉瓦風の飾り壁を立てた庭の家やテラコッタ風の屋根瓦、木製のガレージ扉のある家々、小さな瓦屋根の附いた門に松の枝が美しく渡らせるいわゆる「門かぶり」の風情、趣味人の満足を覚えつつ、我が家の出来栄を今日も反芻し、堪能する。

彼の名からも知れるとおり実家は古い一族で、代々村長をしていた家屋

敷は母屋が慶応4年の普請だし、近くの神社も代々親戚が禰宜をする。武家ではなかったが、事実上名字を使い、氏族の神を持っていた。門構えは神社仏閣のような唐破風で、玄関は入り母屋破風に軒唐破風が入った壮健なもの。その例に倣って彼の自宅も復た古式に則った切妻破風を模した造りを基調に傾斜のきつい高い屋根はどことなく洋風ですらあり、天を衝くように聳える尖塔を想わせるシルエツトが彼の無意識的な永遠の真理であり、衿持であった。

成し遂げて充たされた笑みを浮かべ、バスの停留所に着く。

傘持って立ち、待つ。時折、車が小さな水しぶきを上げながらざあつという音を立て通り過ぎるそこはかかない哀しき。その感傷も不思議と愉し

い。バスが来る。ノン・ステップだ。いまでは増えたが、そうでないバスもまだある。こういう配慮された交通機関が標準である地域に住むという自足の念も又彼のお気に入り。感情だ。乗った。湿った空気の匂い。シートに坐るとスマートフォンを用いて、定期購読している経済新聞に目を通す。雨は強くなっていた。駅前で降りて、エスカレーターに乗り、高架の改札の脇にあるキオスクで新聞を買って快速電車のプラットホームで屋根からビチャビチャ烈しい音を立てながら落ちる雨の水気を感じつつ、四つに折った新聞を読むように眺める。構内のアナウンスが「間もなく東京行き快速列車が到着します。黄色い線の後ろに下がってお待ちください」と言った。

首都の背景は鬱々たる雨雲の灰黒が濛々と、人を不安な気分にさせる。ビル谷間を縫うように廻る高架、首都高速道路上にいる。高架はJCTなどでは左右前後から集まり、上下に何層にもなつて、今日のような天候では下層を走ると暗さを感じるほどであった。

水滴はワイパーが振られるたびに消えるが、復たすぐにフロントガラスを埋め尽くす。1メートル進んでは止まる単調な繰り返し。ベントSLRに乗る若い男、朝なのになぜかサングラスだ。トラックのディーゼル音がガラガラと脳髄に木霊する。長いボブカットの人工的金髪の女性がジープ

チェロキーに乗り、雨だというのに窓を開けて肘をかけている。工具や脚立など満載のバンはシルバーだった頃の面影がない。アフリカ系黒人の中年男性が運転するレクサスに若い西欧系の白人女性、ラテン系か、いや、スラブ系に見える白皙の皮膚に眉のはっきりとした、睫毛の長い女性だ。いったい、この二人はいかような関係なのだろうかと無意味な空想、詮索をするも、むろん、この物語には何の関係もないのだ。ただ、いまここに在る事実というだけでしかない。事実には興味がなく、ラジオのトーク番組には興味が湧かず、ニュースの類しか聴かない彼でも、そういう妄想はする。だからと言って、それをどうこう責めることもなく、無味乾燥にラジオは言う、

「次は交通情報です。首都高5号池袋線は飯田橋から竹橋ジャンクションまでの渋滞。6号向島線は江戸橋ジャンクションから向島まで断続的に渋滞が続いています。京葉道路は市川インターチェンジ近くの下り線で故障車が停止しているため……」

ラジオ放送を聞きながらあうえいお邂叡雄は自家用車のハンドルを握っていた。右手を胃の上に当てた。彼はいままさに放送された5号を竹橋ジャンクションに向かって走っていた。しかも竹橋から都心環状線に乗り換え、江戸橋ジャンクションまで行ってから6号に乗るつもりでいたのだ。既にこの5号の渋滞でうんざりしているのに……どうやら愚かな選択をしてしまったらしい。久々の首都高速道路で、まったく勘が働かなかったのだ。考える

力も湧かなかったのだ。

この天候のせいもあるに違いない。柔らかな霧状の雨は大したことないが、雲は暗く重く、かなり低い。30階以上あるビルディングはほとんどその階から上が雲の中にあって見えない。煙草をくわえたが、ジャケットの胸ポケットに入れたはずのライターがなかった。きつとセイフ・サービースのガソリンスタンドでレシートをいったん胸ポケットに突っ込んでから考え直してズボンのポケットに入れた際に落としたに違いない。何かカチリという音がしたが、ちよつと見廻して何も落ちているように見えなかったし、急いでいたのでそれ以上確認せずに車を走らせてしまった。高速に乗る前にコンビニで買ったばかりのライターだったのに。しかし98円に

過ぎない。20数年前だったら気にも留めない金額であった。

「厭なことばかりだ」

しかも雨は烈しくなり、唐突に眼の前が銀色の波打つカーテンで覆われ、見えなくなる。「うわっ」

危ない。ゲリラ豪雨だ。豪雨と突然の雷、そして竜巻が昨今、いや、この数年来の恐怖だ。もしこんなときに大地震が起こったらどうなるのだろうか。いまマンション購入を検討しているが、やはり地震のことを考えると踏み切れない。多額の借金だけが残ったらどうなるのだろうか？ 胃の腑から重たい熱い溜息が胸にジワリと沁みるように内籠もり上がる。「あゝ」

雑居ビルの壁面に焼肉チェーン店の看板があった。『土曜日家族割、平

日タイム・サービス……』

鈴家貞次はテレビを観ていたが、スピーカーから警告音が鳴り、テロツプが流れた。速報だ。番組を録画しているときに出ると、これも一緒に記録されてしまうので、頭に来るものだが、いまはしていいないので大丈夫。いずれにせよ、仕方ないことだ。世の中を変革するわけにはいかないのだから。

『緊急速報 茨城県鹿行地域に大雨警報』

小笠原諸島に辿り着いた途端に、熱帯低気圧に変じてしまった台風27号

は只管淋しい寒い雨のみをもたらししていたが、今朝はもうない。ただ波は未だ荒いので漁には出られない。缶に入れてある鮫の肝油を柄杓で掬つて、くいつと飲む。若い頃にヘミングウェイを読んで以来、これが止められない。古くなつた船をしみじみ眺め、こいつも永遠の敗北のようだと満ち足りた感傷を覚え、ニヒルな気分でつい顎に手を当ててしまう快。

頭陀ずだあつしはパンク・バンドをやっている高校生だが、髪をスパークー
ショートに尖らせ、電車の吊り革につかまっていた。耳にイヤホンを指し、
80年代の古い Punk を聴いている。「Oi! Oi! Oi! Oi! Oi! Oi! Oi! Oi! Oi! Oi!」ズ

ボンを下げ、ブレザーも袖は捲り上げている。鞆の中には弁当しかない。ラインでゲームしていたら萌菜^{もなみ}未からメッセージが来て少しチャットする。次の駅で同じ学校の生徒がどつと乗って来た。高校生でいっぱいになる。騒がしくなった。天候が悪いのでいつもより少し多い。

「おい、たかし！」

「あ、あつし。早えじゃん」

「ぎけんな、いつもどおりだ」

「ウソつけ。ってか、おまえのバンド、文化祭エントリーしてないな」

「俺んところはドラマーがめんどくせーんだ」

「あゝ、学校違うんだったな」

「ギターは学校辞めちまったしな」

「ああ、リュウスケか。いい奴だったけどな」

「どってことない。どうせ体育館のしょぼいステージでやっても意味ねーし、わかんねー奴らばっかしだし。めんどくせつ」

どーでもイー会話だ。無意味で、価値もない、ありふれた、世界を構成する数千兆の要素のうちの一つ。日本の一日のうち、どこにでもあるもの。Punk, Punk, Punk……パンクというスラングには、くだらないものつまらないものクズ社会不適合者チンピラ性格破綻者ゴミ下司、という意味がある。

あつしの隣に立って折った新聞を読んでいる五〇近い男が眉を顰める

が、咳払いするわけでもなく、眼を向けようもしない。ただへの字にした口元のしわを増やし、眉根を寄せて血圧を上げるのみ。健康にはよくないが、さりとてサムライでもないのに余計なことをした方が寿命の縮む可能性は高い。

大^{おお}廻^の沙^さ奈^な夏^かは口の中で小さくいつものように唱えた。誰にも知られていない癖。邪気を感じるとこれを呟いて祓うのである。

不空大灌頂光真言、いわゆる光明真言と呼ばれる真言だ。

『唵 阿謨伽 尾盧左曩 (オン アボキヤ ベイロシヤノウ オーム「不

空なる者よ 毘盧遮那仏（大日如来）よ」

摩訶母捺囉 麼拏 鉢納麼（マカボダラ マニ ハンドマ「偉大なる印を
有す者よ 宝珠よ 蓮華よ」）

入嚩囉 鉢囉鞞哆野 吽（ジンバラ ハラバリタヤ ウン「光明を 放
ち給え フーム」）』

古刹の風情は寂莫たるものであった。幸い天候は回復したが、陽射しに
一抹の儚さ、もう影が濃い季節ではない。

しかし薄いオレンジ色の葉や赤や黄緑の枝葉が雑ざるさまを眺めなが
ら、神護寺の長い石段を降り、紅葉にはまだ早かったなと沙奈夏は思う。
古来モミジは高雄だと言われるほど高雄山の紅葉は代名詞的な存在だが、

さすがにもう少し後がよかったのだ。

「むろん、わかっていたわ。でも一番いい時期は宿が取れなかったのよ」

「わかっているさ。僕は何も言っていないよ」

「私もあなたに言っていないわ。自分に言ったのよ」

「ああ、わかってるよ」

「何で？　じゃ、わたしが悪いの？　あなたの休みがなかなか決まらないから」

「そう。僕が悪いんだ」

「ごめんなさい、せっかくの旅行なのに」

バカ／＼しい痴話喧嘩であった。

東京の豪雨は一時的なものだったらしい。いま頃になってまた霧状になっている。マンションを出るときも霧雨だった。これなら大丈夫、と甘く見たが、途中でずぶ濡れになってしまった。少し時間をずらせばこんなにも濡れずに済んだのである。未だ雪がぼたぼたと垂れている。着いたばかりだ。鞆をデスクに置く。「やれやれ」

佐藤イサムは坐るとPCを立ち上げた。会社の窓から外の雨をちらっと見るも、心には何も浮かばない。メールをチェックしていると電話が鳴った。

「いらかゆめ 薨夢商事です」

「いつ納品になるんだ」

「少々お待ちください」

電話を保留にする。隣に坐る松沼貞利に「聞いてるか？」と訊くも、

あしはら

「葦原さんが言ってたのは、先方の都合で未だ向こうを出ていない状態だ
つてことだけです」

「向こうって、ウヴレ社か、ドイツの」

「そうです。ただ、先方のって言ってるけど、実はこっちの発注ミスらしいですよ」

「やばいな。いったい、どんな物なんだ、知っているか？」

「最新の3D映写機らしいんですが、詳しくは知らないです」

「映写機？ 3D？ 何で、JMがそんなものを輸入するんだ？」

「わかりません」

「つたく、もう、ちっ」

受話器に戻る。

「お待たせしました。まことに申し訳ありません、担当が本日、出張で不在にしております……すぐに折り返しお電話させますので。」

はい、ええ、かしこまりました。はい、誠に申し訳ございません。はい、はい。ええ、承知いたしました。はい、早急に連絡を取らせていただきますので、はい」

散々文句を言われ、最後は詐欺師呼ばわりされ、一方的に電話を切られる。早速、朝から胃が痛む。吐息とともに無意識にシルクのシャツの袖をまくる。妻が本社勤務を祝って奮発してくれたものだ。そのときの彼女の微笑みを想い出し、哀しくなった。

昼休み、テラス。鬱々たる雨。新婚旅行で行ったフィレンツェを思い出す。

甃いしだたみ、渋いオレンジ色のスレート瓦の屋根と冥くらい緑のアルノ川、色大理石を奢られたサンタ・マリア・デル・フィオーレのドーム屋根、古い街の

狭い路地裏に、濛うような、あの石の風合いがもたらす、言葉にならぬ深みある滋味豊かな味わい、異国で降る雨には旅愁で人の心を捉える力があつた。雨が降るたび思い出すのである。

それゆえ苦にならない。この季節今日のような気候で折り畳み式のパラソル屋根しかないテラス席を使う日本人は皆無だ。雨でなければ西欧の人たちならば使ったかもしれない。

彼女が敢えて坐るのは仕切り直しのためでもあつた。発想転換の契機を求めていた。クリエイティブな仕事にはこんなやり方も必要だと信じている。

彼女の待つ二ース風サラダと牛肉のタルタルが給仕の手で運ばれて来

た。カウンターの奥には様々な種類のボトルがならぶ。ワイン樽やコーヒー豆の麻袋がデコレーションされている。樽の上には展覧会のチラシが置かれていた。

彼女は仕事の参考にするためにそれらの美しいデザインを先ほど眺めていた。様々な催しがあるものだ。鮮やかなパステルカラーの『フランスロココの夢 De Rêve』、渋いモノトーンの写真『澤田麗人個人写真展「フイエゾーレの街」』、エーゲ海の紺碧と白い聖教教会『Φυλοσοφία 睿智に就いて』、他にも『ガムラン 青銅の銅鑼の神秘』、『牧羊犬同好会 神奈川大会報告会』『新薫緑風会デッサン展』『唐草模様の葡萄酒 Il Vino Di Arabesque』 粗い筆致の文字に血のように垂れる絵具とサイケデリックで

少し気味の悪い、黒い背に赤い腹をしたカルカチュアが躍る『イモリの宴』、『Ignacio 短歌の快』、葛飾戴斗^{たいと}（北斎の門人）の絵の入った『江戸の日本神話』等々。

スマートフォンが鳴った。凌空毘^{りくび}エリナの声だった。

「ああ、梨沙^{りさ}亜^あ、例の図録の表紙だけど」

「うん、もう少しだよ」

「信じらんないわ、聞いてよ、いまさら、しかも作家の方からよ」

「何なの？」

「そうよ、デザインへの注文が出てきたのよ！」

「ええ！　だって日本のエージェントが全部やってたんじゃないの？」

と言いつつも、やっぱり来たわ……と思う。

しかし気が附かないエリナはさらに語気を強め、

「そうなのよ、だって彼女はただ、いいところのお嬢さんってだけだもの、お任せのはずだったのよ。どうしてこんなことになったのか、まったくパニックだわ」

だが梨沙亜はそう思っていなかった。あのギリシア人とスペイン人のハーフが描く絵はいつか世界で高く評価されるに違いない。アヴァンギャルドなのに、古代ギリシアの彫刻が見せるような神々しさがある。まったくスタイルは違うけれども。そう、いつかは。たとえそれが死後であつたとしても。いつになるかなんて誰にも判らない。人の運命は解らない。ゴッ

ホだって生きているうちは絵がほとんど売れなかった。ゴーギャンだって似たようなものだ。セザンヌだってかなりの歳月を待たねばならなかった。この世に多くいる無名の人たち。名もなく死んでいくたくさんの人々。自分だって。

「知ってるわ、でもそれがなぜ」

「さあ、急に自分のプロモーションに目覚めたんじゃない」

それ自体が彼女の作品の一部、表現、コンセプト・リアル・アートのようにすら思えた。そう考えるとき、ふと彼女がプロにならないことも又彼女のコンセプトの一つのようにも観えてくるのである。

悪天候は西へ去った。昨夜の雨は関東地方へ逝った。

長葱や白菜や大根を植えた畑での作業を終えて、新留健^{にいるけん}は農具を軽トラ
ックに積む。畑仕事と言っても彼は農業を営んでいるわけではない。退職
して実家に戻り、僅かな畑地を使って自家菜園をやっているのである。よ
く言えば晴耕雨読の生活であつた。確かに浮世離れしたものだ可我ながら
感慨を抱かぬこともなくはないが、ただ先祖代々の業^{わざ}を継ぐ者がいないの
で、無償で人に土地を貸しているだけだ。感覚は別にして現実的にはそう
でしかない。これを使用貸借契約と言うが、耕作目的で買ったり、借りた
りする場合には知事又は農業委員会の許可が必要になる。さように農地法

で定められているからだ。許可のない売買や貸借権設定は法律上、無効というわけだ。もし借主が使用貸借権のあることを法律上有効にしたいのならば、自らで許可申請の手続きをしなければならない。お互いに煩瑣でもあり、新留にしても代々の土地を自分の代で喪うのは心苦しかったし、そこでこの無償の使用貸借であり、自分たち夫妻の楽しみに僅かな土地のみを残して半ば自給自足的に質素に暮らしているわけであった。だが実際、ふっ切れたような気楽さもある。静かな澄んだ気持ちだった。穏やかな日当たりの場所にある蜂の死骸のように、盛夏の静寂がそよぎ抜ける雑木林の木陰に動かぬ蟬の抜け殻のように、寂しげであつても、いかにも静かな気持ちである。それは又不思議な解放感をも伴っていた。

軽トラックのエンジンをかける。AMラジオのスイッチが入れっ放しだったので、放送が車内に流される。午後二時のニュースだった。

「……来日した監督は日本に長く滞在する詩人のオルフ・リウ（龍）を訪れたそうですね」

「ほう。オルフ・リウという方はどのような方なのですか。寡聞にして存じ上げていないものですから、申し訳ありません」

「彼はノルウェー人の母と中国人の父との間に西暦1955年に生まれました。幼少期はヨーロッパ大陸で過ごしでしたが、父の影響を受けて中国の古典に畏敬を抱き、独学でこれを学び、特にタオ、すなわち老子が遺した道教に惹かれたようです。彼の父親はさほど高い知識を持っていたわ

けではないので、まったく手探りの独学だったようですね。彼は大学では文献学を学び、特にギリシア古典哲学を研究したようですが、古代中国の叡智と古典ヨーロッパの知識が融合して独自の観を持つに至ったようです。オーデインのような風貌を持った、超越的な方ですよ。詩は、例えば、こんな詩です。

『夜の濃紺の 広大な絹を見上ぐる

鏤められた無数の細かな粒々の

螺鈿 霓^{にじ}のようにも 移ろい 瞬くかのようにも見え

黄金に荘嚴された仏像の照り

ゆらりと傾くように動く 鈍いような眩いような

光のように 人の言葉にならぬ 天叡を

読み解くのは

あゝ わたしばかりではない

ともに木の根を枕に憩う 羊たちも同じ

かつて懷王も羊飼いだったとき この天穹を眺めつつ

物想ったであろうことに

わたしもまた想いを馳せつつ 星よ 命の 悠久の 営みよ 』

これは日本に移住以後、1990年頃に創作されたものです」

「何だか、奥深いですね。そしてわたしたち東洋人にも親しみの持てるよう
うな……」

取って附けたような、平凡な、かたちしかない賞讃の言葉は、もう耳には入っていないかった。

新留はその詩が自らの心情に適うような気がしていた。ネット通販で本を取り寄せようと思案し、庭に乗り入れて車を降りると、もうポケットのスマートフォンを探っていた。

午後、契約関係の打ち合わせで呼び出された居荒神人^{いかみ}が社外に出るのは久しぶりだった。いつものように淡々肅々と説明し、任務を終えて帰る道、雨がかなり小降りになったので、彼は敢えて町工場の多い寺田町を通り、

歩きながら小さな工場の間口から垣間見える作業場を何となく眺める。旋盤から切り削られて現われる金属を見るのが好きだった。かたちは異なれども彼の心の奥底に眠っているものは技術屋の魂であった。降りが再び強くなったので、近くの喫茶店に入り込む。喫茶『キャロル』。侘しくも懐かしい雰囲気のある店だった。湿っぽい匂いが漂う。陰翳が深い。ジャズがゆっくり流れている。古いジャケットが飾ってあった。葉巻やパイプの匂いも雑ざっている。

客は少なかった。二人の男たちのうち、一人はアパレル（服飾）関係の人間に見えた。もう一人はジョン・レノンの鬚が最も長かった頃に似ていたが、首に海賊のような髑髏の旗の刺青が見えたので、イメージはまった

く変わってしまった。しかも彼らが飲んでいるのはラム酒だ。ボトルでそうと判る。そう、ボトルで呑んでいたのだ。海賊が言った、

「マテリアリズム (materialism 物質主義) って知ってつか」

「いいや？ 何だ、そりゃ」

「無言、無機質で、無味乾燥に、物だけをぶつつと曝して、そのメッセー
ジ性のなさでインパクトを与えるやり方さ。何でもない日常の品をぽつり
と置いてみたり、敢えて軽佻浮薄に流行りの横文字を羅列したり、白紙の
原稿用紙を見せて文学作品だと称してみたり、無意味にブランドの名を朴
訥に叙べてみたり、万年筆で書いた一つの字に於いてインクの濃淡が出る
事象とか、筆から墨汁を垂らして作った墨痕を、小説と称してみたりする

やり方さ」

「いまいくつか挙げた例を、別のカテゴリーで見た気がするな。

ジャクソン・ポロックの抽象画やアンディ・ウォーホル、ジョン・ケージの『4分³³秒』、もう少し広く解釈すりや鈴木大拙の『喝』の一言のようなものもそのうちに入っていると……」

神人には何の話だかわからなかった。ただマテリアリズムという言葉の響きには、理由はわからないが、彼の技術屋魂に直接触れる好ましい何かがあった。店を出ると、雨は止んで星が見えた。

仕事が終わるとコンビニで日本酒1合の紙パックを買うのが習慣だった。

2. パック買って駅までの道すがら人目を気にしながら夏はハンケチで、冬は手袋で覆って隠しながら呑むのである。次第にほんのりしてきてしこりが緩み、リラックスするのが心地好かった。仕事を終えた後に呑みながら、急ぐこともなく暗くなった街を歩くのは解放感を感じることができ、雨も上がっていた。

「あゝ、生きているうちに、これを何万回も繰り返すんだな」

ほろ酔いで、星影見つつも、感傷的な気分になって独りごつ。むろん数千回であって、数万回のはずはない。友人にも頻繁に愚弄されるが、それがこの男の名もなき人生だった。どうでもよい。星辰を振り放^さけ見て余情

を募らせる愚かさも、いったい、何だというのか。

1万年前のホモ・サピエンスも同じ人生を終えたのだ。誰も知らないし、知りようもないけれども。彼も日本人が数万年後に東京で同じ感情を抱くことになるなんて夢にさえも観なかったであろう。

東京駅で総武線に乗り換え、車内に映ずるディスプレイの映像を観る。音声はない。映像とテロップが流れている。

「……本日公開の映画『セキエキ蜥蜴の紋』の監督、隅田川明久氏すみだがわあきひさが上映後にステージに立ち、公開インタビューを行いました。インディーズ・シーンで注目を集め、今回メジャー初の作品となり、その独特の作風から話題を集めるも、監督は『イタロ・ヴラドから多大な影響を受けた』と、彼同様にイ

ンディーズ世界で高名な、知る人ぞ知る前衛派監督の名前を挙げまし

た……」

この世は知らないことだらけだ。自分の全然知らないところで様々なことが動いている。マジックと言えばマジックのようでもあるな……：酔人はさようにも思うのであった。どこかで誰かが想像もできないような感情を抱き、想像もできない行動をしている。彼が想い泛べようもない悩みを悩み、取るに足らないと思えるような歓びや、凄まじい贅沢に飽いた眼で世を睥睨しているに違いないのだ。いや、そんなに遠くへ想いを馳せなくとも、あの灯りの点いた小さな窓の中では自分とは全然考えていることの違う家庭があり、人生があり、小さなドラマや生死があるに違いないのだ。

この世は脈絡のない壮大なモザイクだ、という言葉思い付き、我ながら至言だと満悦する。

津田沼駅で降りる。パルコを左手に見ながら少し歩いて、新京成電鉄の新津田沼駅に入り、松戸行きに乗る。紙パックは東京駅で買い足しているので、その頃は4パック目だ。プラットホームにあるトイレで用を足しておくのも習慣である。スマートフォンでニュースを読んだり、定期購読の雑誌を読んだり、ダウンロードした映画を観たりしながら、ちびちび吞んで、すっかり楽しくなって帰るのであった。

彼女は人が言うほど素直でも素朴でも控え目でも『天然』でもない。自分ではそう思っていた。プライドが行動を妨げるタイプだと思っている。貧しい学生であることを都合のいい口実にしていることも自覚していた。だから大学内のカフェのテラス席で友だち数人と坐って談じているときに和泉野いずみのから「七月にイタリアへ短期留学に行くのよ」と言われ、牛エあン・ヨンは眼の前に坐る、緩くカールした長い髪に睫毛エクステの女性に對し、儀礼的に尋ねた。

「へー、すごい、どうするの？」

和泉野はブルガリのウォッチと重ねて手首に嵌めている七宝のブレスレットを揺らす。七宝にはラファエロの絵がデザインされて鮮やかに彩ら

れている。イタリアの碧い空が。

「フイレンツェのね、15世紀後半のフレスコ画を勉強したいのよ」

憧憬と妬みはさほど変わらないものかもしれない。

両手を頭の後ろに当てて少し背を反らしながら、中世古典修復学専攻の梓^{あずさ}琶^わが「いいな、わたしは教授のゼミがあつてどこにも行けなあい」と言う。むろん彼女は本格的なイタリア留学を望んでいる。だがいまが充実し、自分でもそれを強く感じているので、言うほどには羨んではない。そんな振りを横目で見ながら鶉^{うず}野^のは、

「私、柚希乃と一緒に旅行に行くの。ジョグ・ジャカルタを見て、バリで遊ぶんだー。うむうぐ」

と言いながら、バターとヨーグルトのライス・スープを掬って啜る。お腹が空いたからと、独り軽食を摂っていたのだ。

「へー、また行くんだ」

梓琶が可笑しそうに眼を丸くする。

「いいけど、ウノは単位、大丈夫なの？」

和泉野は、

「ねえ、ねえ、エステとかするの？ あ、そうなんだ。うつそー。やばーい。どうしたの？ あ、牛エンはバイトだっけ？ 面接は？ もう決まった？」

「ううん、まだ」

「お土産買ってくるよ」

「ありがとう」

しかし彼女はバイトのことを真剣に考えられなかった。前日の霧雨が嘘のような蒼穹。

紀伊半島は再び雨雲に蔽われ始めた。幼馴染の私立小学生の女の子と男の子が下校途中、いつものように送迎バスを降りて傘を差しながら興国寺こうこくじの前を通りかかる。蕭々たる雨の古刹には寂寥の観があった。

「実朝も可哀そうだけど、お兄さんも可哀そうだね」

「そうだね。僕も源氏は好きだよ」

「何で、北条政子は自分の子なのに頼家を殺させたんだろう」

「別に変じゃないよ」

「へ、どうして？　ほんとの子だったんだよね？　妾の子とかじゃなかったんでしょ？　頼朝との間の。頼朝を嫌いだったのかなあ？」

「そんなの関係ないよ。好き嫌いなんてさ。そんなのかたちだけなんだよ。恋愛感情って嘘なんだ。だってこの前、理科の授業で聴いただろ。雌雄はただ、遺伝子を入り混じらせるためにあるんだって。」

「憶えてないの？」

「えー、憶えてない。まじで？」

そんな話あった？」

「忘れたの？ 昔、生物は皆、細胞分裂して増えていたんだ」

「それは知ってるわ」

「けど、それじゃ分裂した奴らは皆、遺伝子が同じだから、そいつらの遺伝子と型の合うウイルスが出て来ちゃったら、一族が全滅しちゃうじゃないか」

「そうね」

「だから別の一族の遺伝子と混ぜ合わせるために雌雄に分けて交配するようにしたんだ。そうすれば、遺伝子が雑ざつて、いろいろな型の遺伝子ができるだろ？ そうすると一族が一気に全滅なくなってくるんだ」

「へー、賢いねー。」

じゃ、男と女も雌雄と同じなの？」

「あたりまえじゃん。子孫を遺すことが大事なんだ。だから北条家に都合の悪かった頼家を暗殺することを政子は黙認したんだよ」

「そっか。寂しいね」

画廊Azur（あずる）のオーナーである陰水羊翳は画廊の奥にあるプラ
イベート・ルームで、来客と様々な雑談をしながら、気怠い午後を過
ぎしていた。時計が“じいんかつくう”と鳴る。彼はこう語った、

「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの絵が売れたのは、彼の生前に於いては、短い生涯の晩年（未だ三十代後半だった）に一枚だけでした。買ったのは画商だった弟のテオです。『赤い葡萄畑 *La Vigne rouge*』という絵でした。」

芸術は美を愛する。美は涙にこそある。悲劇に滂沱として禁ぜざるも、幸福のあまりにさざめ笑いながらあふれ零れるも、聖なる伝説に感涙し、歴史の無情に悲憤慷慨し噴出するも美のゆえです。『あはれ』とも言うべきでしょうか。

彼は芸術に愛されたのです」

沈鬱で無表情な声を祓うように清川丈文きよかわただふみは話題を変えた。

「そうすると、あなたから見て、昨今の芸術の傾向はどうですかね。

例えば俄かに話題になっているイタロ・ヴラド監督です。彼の3Dはもはや映像を超えつつあります。映画や芝居やオペラ、或いは彫刻や絵画との境界線をなくしました。存在性を帯びた立体映像で、ほとんど現実そのものです。むしろ現実にはないものをも現実のようにリアルに創り出します。そういう意味では超現実です。

また現実よりもありありとしているという意味でも超現実かもしれません。

リアリズムと言うよりは」

「美術の世界でもそれを取り入れようという動きがあるようですね」

「あなたのような方にはご不快でしょうな」

「いえ」

そう言うと思った、と清川は口の中で独りごちたが、顔には一切出さず、
「意外ですな」

「19世紀に於ける写真のようなものです。又映画も初期においてはそうだったでしょう。一部の芸術家の視点からは懐疑的な眼で見られたはずです。イタロ監督のホログラムもそれらの延長線上にあると言ってよいでしょう。私は別に否定はしません。どのような芸術も肝心要なものはその質なのです。魂です。手法や様式ではありません」

3D複雑ホログラム映写機 φαντογενον ファイノメノン はほとんど現実

と変わらない現象を映ずる機械。映像が視覚聴覚のみならず、嗅覚や味覚をも刺激し、硬軟冷熱軽重などの触覚をも錯覚させる。特殊な装置を用いずに自然に五感に訴えるバーチャル・リアリティであつた。

監督と切つても切り離せないのはウヴェレ社が開発するにあたって彼の意見を大いに受け入れたからである。これは異例なことであつた。様々な憶測が流れたが、イタロの神秘的なイメージを利用したのではないかというのが、最も有力な説となつていた。確かに若き監督は実在性が疑われるほど謎に満ちていた。

羽ペンで手書きしたかのような流麗な書体の文字で記された序奏曲、アペリティフ。

『壮麗なときの始まりは、いと静かに産声を上げぬ。あまりに微かなるさやけきそよぎ風のように、知る人もなく野の花のように、始まりぬ。』

いみじくも古人が大いなるものは鳩の歩みで訪れんと言いしがごとし。やがて孕みの兆しをなだらかに籠もり上がらしむる序奏の弦楽四重奏は深き黄昏のごとき憂いを帯びて、儚きあこがれと、激しき悲劇とを予兆させるよう、低く高く緊張を次第に膨らませて逝く』

木目も美しいマホガニーの小円卓の上に、装飾された一冊の書籍が置かれている。

深い黄昏の茜を帯びた黄金色の光が書齋をはつきりとした陰翳に分断していた。

角背の上製本で全体に独特の風合いを醸す羊皮の鞣革やモロッコの山羊の革が用いられた装丁、ふちには濃いタン・カラーの革が張られ、角はさらに馬革で補強されている。スクリプト体の金の文字でウォルト・クリシュナ・カーマーカーと浮彫印刷されていた。本の題名は変化しながら耀く青で記してある。青の洞窟のような深い移ろう碧。アテナの双眸のような蒼。その表紙を開けて扉をめくれば、紙質は和紙のように柔らかく温も

りのある味わい深きもの。刷られた文字は独特のフォントで、やや縦に潰れて幅広の安定した形状で、文字間は狭く、数珠繋ぎのような高密度な雰囲気視覚させるが、読むには適するとは言えず、本と言うよりも工芸品のようなコンセプトが感じられた。むろん幻影だ。

冊子は何も語らない。

その小卓を挟み、二人の男が向かい合い、坐っている。彼らの眼には本であつてもただのパルプ繊維、山羊羊との皮、布切れなどであつた。

伶俐で凜冽とした白皙の麗しさを滴らせ、白にしか見えない金髪を垂らす青年は言葉が続ける、

「いったい人が物語を書くのか、物語が人に書かせているのか。

これは受け身が能動であるという仮説だ。正確に言えば、物語が“書かれ”させている、というべきものだ。逆の言い方をすれば書くという能動的行為が実はそのまま受け身であるという説だ。“書いている”“されている”ということだ」

拝聴していた青年は戸惑い、くつきりした黒い眉を顰め、艶やかな褐色の皮膚をしわ寄せる。ウェーブの強い黒髪に褐色の肌で、ジャケットは色が定かでなくてよれよれだった。

「興味深いお考えです。」

僕たちが架空の物語で、物語たちが真の現実なのかもしれません。僕たちは書くという行為によって生み出され、紡がれて存在しているだけなの

かもしれません。伝統的な考えに従えば、存在は五蘊ごうん（色・受・想・行・識）の縁起によって生じたものとも言えますから」

しかし白き金髪の青年は興味なさそうに言う、

「さて、話を戻そう。これからの計画についてだ。

ディナーに喩えるならば、高級車に乗り、最高の料理を食べさせる一流店の前に横付けにしたところだ。そう、三叉の鉾のエンブレムを燦然とさせたマセラッティの、贅沢な革張りのシートにでも坐っていると思ってくれたまえ」

「・・・ふむ。そ、そうですか」

ウェーブの強い黒毛のウォルトは貧乏だったので想像もつかない。

「これからドアマンの開けてくれえる大きな櫛の木製の重厚なドアから入り、慇懃な黒い服の男に名前を告げ、準備のできるまでの間、ウェイティング・バーでアペリティブの前の酒を舐めるんだ。それがこれから始まる様々な下拵えなのさ。しかしそれは私の仕事だ。君は知らなくていい。君は君に与えられた天分を全うさせることに専念してくれればよい。存在すべてそのように図れば自ずと部分が繋がり、お互いに補い合い噛み合って、世界の円環が完成する。君の言うところの縁起を成して、一つの世界が構築され、遂げられる。我々すべてが世界に必須な要素なのだ。だから存在なのだ。

さあ、才能は神が与えたもうた世界の装飾だ。

王宮を飾る鮮やかな色彩の絵画や、見事な躍動と抒情を語る、生命を秘めた彫像たちだ。桃色やミント色や水色などの様々な色大理石の円柱とその柱頭飾りの様式の華やかさ、ハルモニアとプロポーション、それは生を歓び、神を讃え、存在を肯定する。宇宙をならしめ、無空の殺伐たる瀑激の濁流のさなかに敢然と聳えたる永遠不滅の棹を立てる。価値体系を打ち立て、すべてに意義を與^{あた}える。生命を与えて甦^あらせる。生命とはそういうものだ。生存ではない。生命とは芸術であり、神のごとく美しい秩序と明晰さを持った天の建築のような哲理なのだ。

現代人の何と醜く浅ましいことか。彼らは生きるに価しない。宇宙の命題を裏切っている。彼らがゴキブリに怖気を震うのはさしずめ近親憎悪と

いうところだろう。

さて、しかし、いまはそのような無駄口を言うときではない。時は来た。私は君のなすべき仕事を私は持つて来た。必要なもの、欲しいものは何でも言ってくれたまえ。物書きに何が必要か、私には皆目わからない」

おずおずと、

「よろしければ最新のタブレットPCか、モバイルPCが欲しいです。もし何か現実を写し書かなければならないならば、取材しながらその現場、現場で書き留めたいのです」

彼の上着の胸ポケットには使い古された万年筆と汚れてくちやくちな小さな手帳が差し込まれていた。

「ふむ。優れた考えだ」

そう言いながらもまったくそう思っている様子はなかった。

「すぐに最上のもthingを用意させよう。君には十分な報酬を出そう。君の仕事はそれに値する。君はこの物語の筆記者なのだ」

「よくわかりません。何を書き留めたらよいのでしょうか」

「事実だ。司馬遷のようにね。いや、これから起こることは架空の物語と言うべきものなのかもしれない。人生はすべて架空の物語だ。人間の側から見た勝手な解釈さ。鳥や蝶や兎や蜂にとっては人の言う人生など、空想に過ぎない」

「これから？　何かが起こるのですか？　いったい何が起こるのですしょうか」

「老いぼれた男の愚かな夢さ。君を人類最上のディナーに招待しよう。それは自然にわかる。何もかもが順風満帆に運ぶ。当然だ。偉大なる弾劾者“大審問官”がそのように謀ったのだから。君は既に、私が行くことを勧めたパーティーで彼に会ったはずだ。さて次だ。明日、画廊AZUL（あずる）に行きたまえ」

「あ、そこには行く予定でした。知り合いが合同展に出品するので」
「そう、物語は既に始まっているのだ。」

さ、行きたまえ。行くのだ、大きな翼がゆっくり広げられ、曲げられ、大空を漕いで雄大に羽ばたくのだ。鳳凰のように。莊子の逍遙遊篇の書かれた鵬（ほう）という鳥のように。その書によれば、鵬の背の広さは何千里あるか見当も附かないという。鵬が飛び立つときには雲が集うときのように日が陰ってしまい、南へ飛び立とうと羽ばたくときは三千里の海面を打ちたたき、風を巻き起こして三万里の高みに上昇する、と。

ふふ。遙かなる夢だ。人の終わらないあくがれだよ。夢は髣髴と、明け方の陽炎かぎりに立つ幻として、霞や霧に紛れてひらりと笑うようさざめくよう幽玄に移ろい、仄か微かに泛び上がるものさ。君はその無常のかたちなき

かたちをそのままに書き留めて欲しい。あたかもオシアンが誇りと栄光とを賭けて烈しく闘う戦士たちの刹那を耀く詩句で書き留めたように。喻えるならばホメロスがトロイアの戦争を永遠の史書に詠ったように。

物語の存在する意味とは、虚しく儚いことを教えるためにあるのさ。人は努め、学ぶ。そして虚しく儚く死す。ふ。素晴らしい。クールだよ。実に素敵なことだ。君はその民族の血の中に現実を五蘊と観ずる魂を宿している。そして五蘊が皆空であることを惑いながらも臆おぼろに感覚している。そう、感覚に過ぎないが、他に何が存在するだろうか」

ウォルトは独り帰り道で考えた。これはチャンスなのだろうか。しかし

自分は結局無名のまま終わるのだろうか。いく千万もいたであろう知られざる芸術家たちのように。彼らの中には才能ある者もいたに違いない。

「あなたたちのことは僕が知っている。誰も知らなくとも僕が。あなたたちはけして忘れられてはいない」

布瑠部 由良由良止 布瑠部 (ふるへ ゆらゆらと ふるへ)

「布瑠^{ふる}の言^{こと}」、又は「ひふみ祓詞^{ひふみ}」ともいう。

『先代旧事本紀』によると、「一二三四五六七八九十^{ひとふたみよいつむななやこのたり} 布留部 由良由良

止 布留部」と唱えれば、死人も生き返ると伝える。死者蘇生の言霊といわれる所以である。

寢室。安らかに眠る。その脳内には、未だかたちならぬ映想がもやかすみのような髣髴し、しずかで溟滓^{ほのか}な芽^{きざし}が淡く布を染めゆくように萌え始めていた。揺ら揺らと焰のように。やがて星雲の生まれるときのように渦巻き。

渾沌^{まろか}りながらも、晰らかさを増し、ゆくりゆくりと色定まり、かたちを

做^なし始める。

だからまだ瞼は上げない。幕が上がらなければ舞台は始まらない。現世^{うつしよ}が始まらなければ夢^{ゆめ}は終わらない。牛^あエン・ヨンは微睡の中に舞う幻影を観じ微笑んでいた。

それは紫摩黄金の髪を激しく振り靡かせ歌う、アデル・イグナティワであつた。フランス人の名とロシア人の父姓を持つ碧眼白晳の巫女は絢爛な刺繍の帯や金欄緞子の西陣織や黒地に紅蓮の絹物や平安の時代のような裳や頒幅などをアレンジして身にまとい、眼も綾に亂じ、翻る。動く芸術のように。

まるでオーロラのようなだ。

変な喩え？　でも仕方ない。もともと言葉は虚しい。

なぜ？

きつと人を美に駆り立てるため。愛に焦がれさせるため。

だから永遠に拙く、浅く深みなく、形式に堕して自由がない。夢の中にしか美は生きられない。

あゝ、だから終わらせたくない。けれども終わるから美しい、終わるから存在する。と誰もが思い附いて得意になって人に弁じそうな陳腐な科白を、もう一人の自分になって眺め、味わい舐り廻すかのよう、わかりなが

らも虚しく儚く頭蓋骨の内側の漆黒の闇で繰り言する。

あたかも睫毛を伏せて憂う若き哲学者のよう、喪われた愛を心に秘めた芸術家のよう、酔い痴れ、悩みのポーズで自問する。「もしもそうだとするならば存在とは、美なのか」と。

その愚かさを楽しむ。

愚か？

あゝ、いったい、愚かでない人がいるだろうか。

愚かでなくては生きて逝けない。

想いを遂げられない。

だって、いつかこの想いもすべてが無に消えて、知ること、見ること、聞くこともできなくなってしまうから……愚かでなくては、この虚しさに堪えられない。あたりまえなことだけれども、我々は誰もが余命を宣告された者なのだ。その現実が感覚に迫るとき、それは言葉などには尽くせない。

アデルの姿が瞼の裏で翻るときに、牛エンの心を奪った感情はそれに近いものだった。正確に言えば別の角度から来た同質の感情だった。捉え難い美を眼にして、ずっと抑えて、眠らせていた動機が急に足掻き藻掻き暴れ出したのだ。あたかも死を目前にして堪えられず想いがあふれ出すように……

現実の中で実際に動くアデールを初めて見たのは、或る画廊でのライブだった。

絵やオブジェを創る作家の合同展覧会で、或る日その画廊の奥にステージが設けられ、幾人かのミュージシャンの演奏が行われた。彼女はその中の一人で、バイオリンとアコースティック・ギターとパーカッションの男性三人を従え、パフォーマンスをしていた。

曲はすべて彼女の作曲で、ボヘミア的なサウンドだった。十二拍子の手拍子で始まる。

しばらくそれが続き、空気がラテンに変わる。アラビア系の顔立ちの男がパーカッションを叩き始めた。音はマイクを通し、非常に重たいサウンド

を響かせる。狭い会場なのだが、直接聴こえる生の太鼓の音、乾いた軽快なサウンドと、電氣的な処理によりデイストーションのかかった音が重なって聴こえる妙味。

続いてギターが入る。黒い髪を真っ直ぐ腰まで伸ばした男が弾くのはフラメンコ風の哀愁を帯びたフレーズだが、ギターはナイロン弦（ガット弦）の張られたフラメンコ・ギターではなく、ギブソンのアコースティック・ギターだった。アクション（弦高）が高めに設定され、ガット・ギターのようなビレ音が賞味できるように工夫されている。

バイオリンの男は強く縮れた長い髪を揺さぶりながらロマの旋律を奏でる。アデルがマイクの前に進み出る。1950年代風の大振りのガイ

コツ・マイクをつかみ、滑らかな声で、アンニユイに歌う、

「愛よりもファミーユよりも Art. あゝ、Art は神の雲霞に翳される」と、神の恩寵を浴びること、神への讃歌、人は神のために人を愛する。だから最高の芸術をあなたたちに捧げます」

ギタリストはギターの弦を時折ベンディングし、ブルースのようなフレージングを混ぜた。アデルは巫女のように舞い、巫女のように跪き、祈る。情熱的なリズムとメロディのさなか、まるで教会のように静謐で清浄で神聖であった。

中エンがそこに入っただけは偶然ではなかった。

絵が好きだった。ただ何となく絵を画くことが好きで、特に西洋絵画に

憧れたが、しかし油絵のような高価な素材は思いも寄らず、水彩を少し画くだけであつた。引いた線に色彩を采配する歓び、小学生の頃から独りで家において、ひたすら画いていた。

高校を卒業しても、美術系の学校に進学することもなく、普通の大学に通い、大学でも文科系の同好会にもサークルにも参加せず、外国の美術館へは行かず、絵画修復の技術を学ぶためにイタリアに留学した友人の話を羨ましく聞きながらも、海外留学する勇氣もなく、時々画集を買ったり、近くの美術館に行ったり、いや、それさえ稀で、普段はインターネットで様々な絵や展覧会情報を見ているだけであつた。

アデールの動画をユーチューブで見たのは漠然と様々な動画を見てい

るときであつた。それはロス・ボヘミオス Los Bohemios というユニットで、東京らしきどこかの歩道で路上ライブをやっている映像だった。

彼女はスパニッシュ風で、モロッコ風で、サイケデリックな衣裳に縦長の二つの絵をならべその狭間に立ち、ケルト十字架に彫られるような文様の網状の冠をかぶっている。絵はアデルが画いたものだと後でわかった。異教の女神のごときアデルは動画の中でこう言っていた、

「芸術は神聖なもの。神に捧げるべき神聖なものです。だから人は自由でなければなりません。欲望に囚われない自由な心だけが神に届きます。だから私たちは自由なミュージシャンです。お金も名誉も求めない。神のためには歌い、奏で、捧げるだけです。神の御心のままに。」

そうです、すべてが神の御心、神の叡智です。

私が歌うことも、聴くことも、生きることも踊ることも。すべてが神への礼拝です。祈りです。神の愛するままに愛します。神のために愛します。音楽ですべての宇宙を歓ばせることが神への讃歌、神への祈りなのです。礼拝なのです。

鳥や獣のためにも歌います。草や樹木のためにも歌います。風や岩や雨や雲や蒼穹や海や大地や月や星や銀河や時空や宇宙一切森羅万象のために歌を捧げるのです。それが礼拝です。

神への愛です。神のために一切を愛する。人は御前に跪くのみです。私は現実を懷疑しない。私たちの魂に美しい智慧の光をお与えくださいまし

た神の御心のままに」

そして膝を地に突いて祈る。

まるで本当に天上から光が当たっているかのように崇高に見えた。清らかで神聖で静かだ。

中エンはこれを私たち東洋人がやったらクサイだろうなと思った。欧米人って何でもこういうのが自然に見えるんだろうと考える。どうしても欧州の人に憧れてしまう自分が嫌だったが、それはどうにもできなかった。彼女はインターネットで検索し、『唐草模様の葡萄酒 IL VINO DI ARABESQUE』という展覧会に行き着いた。それが先に述べた複数のアーティストによる合同展覧会だ。

会場となった画廊は Azur（あずる）。

並木の木陰になった歩道に面して木の扉が開いている。数人の人が立つて談笑している。扉はヨーロッパの農家か山小屋のような感じた。建物は赤煉瓦を模している。鎧戸の閉じた窓もある。

中エンは恐る恐る扉のある入口の前に立った。中を覗く。フランスに行ったことはないが、パリにありそうな古い石造りの小さな画廊のようだと思った。狭い中に十数人がいるためか、深海のような暗さがある。勇気を出し、入る。意外に奥が深い。チェンバロを奏でたときの音にも似た御伽話の国のような、サイケデリックな空間だった。様々な民族楽器が過剰なデコレーション・ケーキのよう、絢爛なメリーゴーランドのよう、華々し

く廻るイメージがある。

Azur (あずる)。フランス語で紺碧という意味。そう言えば入口に「雨の日の L'azur」という油絵がイーゼルに架けられ、飾られていた。蒼穹のようなフレンチ・ブルーと白い雲のようなもの、ほんの少しの薄青紫が点ぜられ、遙かな、そして哀しい抽象画だった。画家の名前はエイト・ユンだった。無名の芸術家だと彼女は勝手に思った。きっと死ぬまで誰にも認められずに終わる人なんだ。この人はどういう風に考えているんだろう。自分はその道から逃げてしまったが、多くの人からは正しい選択だと言われる。けれども虚しくて無力感がいつも彼女のエーテル体を、光差す透明な深く冥い海に浸す。

アデールの絵もあつた。荒々しいタッチの濃く暗い赭に漆のように静謐で均等な黒、コリーダ・デ・トロス *Corrida de toros* と名附けられ、長く湾曲した角に伸びた首と細いけれども筋骨たくましい肩、その牛の片眸だけが絵の中でコバルト・ブルーと地中海のように燦めく藍と深く鮮やかなフレンチ・ブルーで揺らぎ煌めいている。ユーチューブにあつたのと同じような色彩感覚なので署名を確認するまでもなくわかった。

奇抜な雰囲気の人が多かった。白銀にも見える長いプラチナ・ブロンドの髪の若者は端正な顔立ちで大理石のような肌、薄い水色の眸は白に近いステッキを持って優雅に歩きながら眺め、棚にあるリーフレットの類を手にする。ペイズリー柄にも似た赤と白の図柄で、キエンはその色彩が欲し

くなった。男が牛エンの方を見て微笑んだような気がした。

アナウンスが入る。

「会場の皆さんにお知らせします、間もなくロス・ボヘミオスのライブが始まります」

狭い会場の一番奥に小さなステージ。数人の観客。それでもぎゅうぎゅうだ。

「あ」

牛エンは思わず声が出た。

「あの人」

襟を開いた白いドレスシャツに黒いタイトなスーツ、濃い真っ直ぐな黒

髪にくっきりした眉と黒い双眸、皮膚は明るい小麦色でつややか。高くはないが、顔の中央に鼻梁がすつと伸びる。

彼を見たのはAzurに向かう途中だった。

画廊は最寄りの地下鉄駅からも少し距離があり、牛エンの家の方からは乗り継ぎが少し面倒な駅だったので、大して近くもない東京メトロに乗るくらいならば潔くJRを使つてやろうと決め、会場からかなり離れたその駅で降りて歩いた。その路の途中で奇妙な男を見たのだ。

彼はポケットから何か赤くて小さな薄っぺらい物を出して路傍にそつと置いた。何もなかったように歩く。また少し行くと同じように置いた。歩く。置く。置いた物を見ると、紅葉だった。「え、まあ！　どういふこ

となの？」

しかもほとんど等間隔をおいて紅葉を置いていることに気が附く。何の暗号なのかしら？

昔読んだ怪盗アルセーヌ・ルパンを主人公にした短編小説を思い出す。ミステリー・マニア？ それとも本当の犯罪者？ スパイとか？ まさかね。

興味を惹かれ、後ろを追い続けた……というのは正確な表現ではない。結果的にそうなったのだ。偶然にも彼が行く方向は彼女が向かいたいと思う方向と同じであった。いや、むしろ、後で考えれば偶然でも何でもない、当然のことだ、同じ会場が目的地であったのだから。とは言え、そのまま

会場まで一緒に入ったのではない。もしそうであるならば会場の中で彼を見かけても驚きはしなかったであろう。

道すがら、一度、彼は振り返った。『尾行』に気づかれたかと牛エンはドキリとしたが、そうではなかった。彼の眼は遠くを見ていた。どうやら自分の軌跡を振り返り、自らの遺した行為の全体像を眺め、確認しているかのようにあつた。味わっているかのようにも見えた。

だが、牛エンと眼が合った。

彼は困ったようにわざとらしく眉根を寄せ顰めて唇だけで微笑を作り、「コンセプチュアル・アートなんです」

そう言つて肩を竦め、さつと角を曲がってしまった。彼女はあまりのこ

とに驚愕や畏怖すら湧かず立ち竦んでしまった。しばらくしてから言葉が在ったことに気が付き、言葉の意味を考えたが、何の事だかわからなかった。数十秒が過ぎたそのときになってようやく彼女は自分自身もその角を曲がらなければならぬことに気が附くのであった。恐る恐る曲がっても、既に彼の姿は見えなかった。安堵した。

その彼がここにいる。「雨の日の [L'azur]」の前で顎に人差し指と親指を当て、首を傾げている。絵に見入る双眸は深く憂愁を帯びていた。なぜだかわからない。奇妙な男はいきなり額縁に手を掛けて画架から絵を持ち上げる。

「あ」

思わず牛エンは声を挙げてしまつてから恥ずかしくなり、周囲を見る。前に立っていた黒ぶち眼鏡の鬚男が振り返つて訝しげに見えているだけだった。花柄シャツに黒い細身の上下、物凄い長髪。その時代遅れな雰囲気はあたかも、十一世紀の鉄兜の騎士の戦争に、頭にバターを塗つて口髭を三つ編みに垂らし、巨きな斧を振り廻す戦士が紛れ込んだような感じだった。牛エンは余計に赤面したが、全体としては反応がないと言つてよい状態だった。やや安堵し、また視線を戻す。絵は逆さまになっていた。何と
いうことを……

彼は逆さまにしてからまた元のポーズに戻り、眺めながらも再び思考に耽る。やがて仕方ないなという表情で向きを変え、牛エンの居る方向に歩

む。驚く必要はなく、彼もまた他の人同様にステージへ近附こうとしているだけだ。しかし彼女は慌ててステージの方へ顔を向ける。そして横目で男の動きを追う。男は牛エンに気が附かず、人を分けてステージのすぐ前まで行く。その直後、三人の男と一人の女性がステージに上がった。

アデルが少し俯いて黄金の髪で青い瞳の嵌められた眼窩を翳す。静かな優しい声で、

「ロス・ボヘミオスです」

十二拍子の手拍子が同時に起こる。

牛エンは絵の方を見た。誰も気にしていない。直そうともしないし、あのとき注意もしなかったし、展覧会のスタッフに知らせようとした者もい

なかった。あり得ない。なぜ。なぜなの？ 合理的な説明は一つしかない。あれが彼の作品ならばあり得る。だとすればあれは淡い雰囲気の抽象画ではなくて、額縁も含めた素材の存在全体が何らかを表現するコンセプトだという穿った読みも、必ずしも外れではない可能性がある……牛エンにはそれ以外の説明が思い泛ばない。

だとすれば彼の名前は「エイト・ユン」 どの国の人だろう。顔は東洋人だけ……。考え込みながらいつの間にか傍にあつた棚から無意識に赤と白のリーフレットを手にする。鮮やかな様々なちらしからそれを選んでいた。

「失礼します」

外国人訛りのある声で彼女の脇から手を伸ばし、ウェーブの強い黒髪に褐色の肌の男性がリーフレットを手に取る。ポケットにくしやくしやにしまう。体臭が強く、ジャケットは色が定かでなくてよれよれだった。

「あ、ごめんなさい」

牛エンは反射的に身を引いて謝り、自分もリーフをバックにしまった。それと同時にライトが落ちて暗くなる。原色のスポットライトが動き色彩が交差する。パークションが始める。ギターが奏でられる。「ああ、これだわ」

歓喜に満ちて牛エンはすべてを忘れる。ラテンの熱いリズム、烈しければ烈しいほど死を孕む生的情熱、赤と黒、切なさ、古代から続く人類の哀

しさ、古い聖堂のような神聖、歴史の累積である生命の不可思議。コンガが原初の血を熱くする。ギターの弦が古い郷愁のような感情を甦らせ、喪われた本当の自分を、自分が本当は誰であったかを思い出すかのような、このどうしようもない、実存する、天啓のような、強く鮮やかな、現にここにある、紛れもなく現実である、確信の感じ。

バイオリンの音色はなぜこのように深く複雑で、すなわち Realistic な存在で、つかまえられるのか、捉え難いのか。むろんそんなことを探求しはしない。答などあるとは思えなかったからだ。理由などない。感覚として明晰判明に存在する事実であつた。だから考えるまでもない。もしあるとしても、それは偽りに過ぎないと本能が告げるだろう。強く警鐘を鳴

らすであろう。

ステージが終わった後、去り逝くアデールと眼があつた。彼女が微笑を泛べた。キエンは自分もリアルな絵が描きたいと希こいねがつた。遠い銀河の燦めきを憧憬の眼差しで見上げるよう、どこまでも明るい蒼穹を絶望の気持ちで仰ぐように。芸術とは魂の篡奪者。

満天の星の街を歩いて帰るとき、彼女は色々なことを考えたが、自分が何を考えているのかわからなかった。夢で観たときと同じようにアデールの姿が翻っている。

アパートに帰っても坐ってぼんやりするだけだった。食事の支度もしなかった。バックの中のリーフを広げた。アルバイトの募集だった。受けて

みようと決めた。資格は要らない、英語が堪能であれば。そう書いてあった。

夢とは不思議なものだ。

なぜ未来や過去が見えるのか。それとも時間性というものが我々の考えているようなものではないのか。或いは宇宙は一つの情報体で我々の意識はそこに繋がっているのか。又或いは単に意識の解釈の問題なのか。つまり意識が事象を解釈する仕方の構造的問題なのか。

源頼朝の死後、権謀術策渦巻く抗争の鎌倉で、わずか21歳で暗殺された

兄、頼家の跡を継ぎ、従五位下に叙され、征夷大將軍と宣下された実朝は良き君主であつた。

建保2年(1214年)6月3日、旱魃に苦しむ諸国を愁いて降雨を祈り、法華經を転読し、翌々5日に雨が降り、13日には関東御領の年貢を3分の2に免ずる。そして6月8日、焼失した東大寺大仏の鑄造と大仏殿の再建に尽力した南宋人、陳和卿ちんなけいが鎌倉に来て鎌倉御所への参上を願い出、15日に対面、その際に彼が三度拝み、泣くので不審に思つた実朝が問うと、
「あなた様は昔宋朝医王山の長老でした。そのときに私は門弟の一人として列していました」

と述べたという。実朝はかつて夢に觀た僧がそれと同じことを言い、し

かもその夢を誰にも言っていなかったもので、その言葉を信じた、というエピソードだ。

なおその後、紆余曲折（実朝は6月に権中納言に任ぜられ、翌月、左近衛中将を兼ねたが、母・北条政子の弟である北条義時と大江広元がその昇進の早さを憂いて密談し、「子孫の繁栄のために、官を辞し、征夷大將軍としてしばらく過ごして源氏の大將を務めてください」と諫めたが、実朝は聞かず、「《将来、後継者を源氏に求めず、皇族から下って戴こうと思うから、私は皇族將軍の父として相応しいように》官職を帯して家名を挙げておくことを欲する」と答え、広元はもはや言わず、義時にその旨を報告した）を経て、11月24日、前世の居場所と信じる宋の医王山を拝する

ために渡宋を思い立ち、陳和卿に唐船の建造を命じる。義時と広元は頻りにそれを諫めたが、実朝は許容せず、建保5年（1217年）4月17日、完成した唐船を由比ヶ浜から海に向って曳かせる。しかし船は浮かばず、砂浜に朽ちた。その後も葛山景倫に渡宋を命ずる。6月20日、兄の次男で、かつらやまかげとも園城寺で学んでいた公暁が鎌倉に帰着し、政子の命で鶴岡八幡宮の別当に就く。暗殺は翌々年正月。

その菩提は頼朝が相模国鎌倉大御堂ヶ谷（神奈川県鎌倉市雪ノ下）に建立した勝長寿院しょうちようじゆいん鎌倉時代初期に眠る。

アデールはユーチューブを見ていた。むろん自分たちの動画ではなかった。アパートのソファに凭れるように深く坐り、膝の上に頬杖突いてぼんやり眺めている。ミント・グリーンの髪を立てロールにした同居人のアキナが「どうしたの？」と尋ねると、

「何でもないわ。この映像、凄いなって思ってる」

タブレットを覗き込むと、

三人の男が輪になって立っていた。口々に「おう、これは」「まさしくマジックだ」「不可思議な」「理解できない」「ヴラド氏、これは……」など感嘆の声を洩らしている。輪の中心には灰色の半透明な40cmほどの妖精が舞っているが、やがて色が鮮やかになり、実在する者と何ら変わらず、毛

穴のない肌は奇跡のような美しさだった。妖精は歌を歌った……………

「CG？」

「そうね。妖精は3Dよ」

「それはわかるわ、でも」

「そう、空間に3Dを映写しているらしいの」

「ヘッド・アップ・ディスプレイ (Head-Up Display, HUD 「ヘッド」) っていう感じだったんじゃない？ あの空間に映像が泛んでくるあれ、戦闘機だったかな、この前、テレビで観なかったかしら、ほら、パイロットが使ってたあれ」

「こんなに立体的でもリアルでもなかったし、色彩だって…」

「ホログラム？　ホログラフィ？　違いが判らないんだけど、そういう類みたいね」

「そうかも。でもただの *holography* じゃないわ。ねえ、見て。まるで空間に実在するみたいでしょ」

「何でもすぐに進化しちゃうのよ」

「ううん……」

そのときスマートフォンが鳴った。アキナのだった。

「誰かしら、こんな深夜に。……はい。ああ、エイト、え、どうするかって？　何でアデルに訊かないのよ。知らないよ。」

ねえ、アデル、エイトよ」

「何？」

「あのことよ」

「え」

「J Mの件よ」

「あゝ、それが何か？」

「参加するのか、つてことみたいよ」

「まだ決めてないわ」

「ちよつと待って。」

ああ、エイト、まだよ、まだ決めてないわ。仕方ないでしょ。私に言わないでよ。ああ、わかった。わかったわ。うん、じゃあね」

「何なの」

「今日までに返事するはずだったじゃない。それで訊いてきたらしいのよ。彼も参加したいのね。あなたのスタッフとして」

「そういうこと？ 別に構わないけど。レオンやホセのスケジュールがうまく合わないのよ。私はどっちでもいいんだけど」

「参加すればいいじゃない。好きにやらせてくれるんでしょ、費用は向こう持ちで」

「そうなんだけどね、何だかね、人に使われちゃうのが厭なのよ。それが正しいかなって」

ノックする音。

「誰？」

「俺さ」

「エイト？ あなた、さっきどこから電話して来たのよ」

「ともかく入れてくれよ」

ロックを解除する。

エイトは話し始めた。

「或る男が俺のところへ来てね。重要な役割が俺に生じるっていうんだ」

「何であなたのところに来たのよ」

アキナが訝しがる。

「これさ」

「何、これ？　ぐい呑み？　雑な作りね。あなたが作ったの？」

「作陶もするんだ。つて言いたいけど、骨董市で安く買ったのさ。古い物らしいけど、五〇〇円だった。骨董的な価値はないらしい」

「実用的な価値もなさそうね」

「これを小さな侘しい公園のブランコに載せて少し離れたところから眺めていたんだ。そのうちにどこかのこどもが持ち去って壊しちゃうんだろうな、とか思いながらね」

「毎日、百円のカップラーメン食べてるのに大盤振舞ね」

「俺はアーティストさ」

「自己満足のね」

「そうさ。クールだろ？」

「で、どうなったの？」

って言うかさ、いったい、何の用で来たのよ。それよりか、或る男っていうのは、何なの？ その焼き物が何だって言うのよ？」

「俺のその Conceptual な行為を見ていたその白髪の男が」

「老人なの？」

「いや、それが若い男なんだ。長い白髪で、白いような薄い水色の眼をしているんだ。服装も正装でエレガントだった」

「昼間の寂しい公園で？ 大丈夫なの？ バンパイヤじゃないの？」

そう言って笑う。ウェイトが顔を顰め、

「からかうなよ。俺にも招待状をくれたんだ。見ろよ」

アデルのもとにきたものと同じ手紙だった。レターヘッドにはヘイル家の紋章が金色の文字で浮き上がっている。ドイツの名門、シャルルマーニュの臣下であった家柄。

50 階建てのビル。

ジム（日本製造株式会社 J M）・グループCEOの執務室。沈鬱で豪華な、深い色合いの木目の調度の数々。ベルベットのカーテンが襞をなしてまとめられ、100インチのモニター、ペルシア絨毯、聖母子の古い油絵、

マントルピース。そこにいる独りの男。

ギラギラしたつやが硬そうな太い銀髪、大きな鼻、太い銀眉、射抜くような大きな眼、がっしりした顎、深い皺。辣腕で鳴らしたドイツでの実績を買われ、倒産寸前のこの大企業を救済すべく、年俸5億円で招かれたグスタフ・ヘイルは葉巻を燻らせていた。室内はあたかも19世紀の霧のロンドンのごとき状態だ。

しかしこれは特別なことであつた。彼もまた喫煙しないことがデフォルトなスタイルであつた。自宅の書斎でも吸うことはなかった。

深く瞑想するときのみ、執務室で彼は紫煙に包まれるのである。コノリーレザーのソファに身を沈め、無意識に手首に嵌めたローレックス・デ

デイト・オイスター・パーペチュアルの竜頭を弄る。柔らかい絹のスーツに深紅のポケットチーフ。背後の書棚に革装丁の大きな古い書籍が壁から壁までならぶ。ヘーゲルの胸像が飾られていた。ペン立てには美しい羽ペンが刺さっている。クラシカルなインク壺。金細工の彫刻が施されたロココ調の置時計が無音で時を刻んでいた。

秘書がデスクの上に置いて行つた書籍を見遣る。自分が興味を示し、置くように言つたのだから在って当然だ。不快に思うべきではないが、不快に思った。しかし手に取る。

今度のイベントに参加したいと言う小説家志望の青年の書いた小説だ。ウォルト・クリシュナ・カーマーカー。名前から察するにインド系イギリ

ス人がイギリス系インド人と言ったところか。『聖なる芸術、芸術家たち』それが本のタイトルだった。微妙に変化しながら耀く青で表紙にそれが記してある。青の洞窟のような神秘的な明るい深い移ろう碧。輝くアテナの双眸のような蒼。表装そのものは濃い縁取りと補強された角以外は葉巻のような風合いのある柔らかいタン・カラー。角背の上製本だ。紙質は和紙に似ている。

無名で貧乏な作家の自費出版にしては豪華だ。

グスタフがウォルトに会ったのはパーティーだった。彼の熾そうとしているイベントを知らしめるために、人の勧めでグスタフが主催し、参加費無料で無名の芸術家たちを集めた席でのことだ。

そのときウォルトは、「食費は一日百円以下で過ごします。昼間は日雇いで肉体労働をし、夜は居酒屋でアルバイトをしています。古くて狭いのにアパート代が高くて大変です。それでも毎日、小説を書いています。眠気との闘いです。疲労との戦いです。知り合いになった印刷屋の社長に相談して自費出版したんです。そのために貯めていたお金をすべて使いました。毎月5万円ずつ、5年間貯めました。どうかお読みになつてください。杖を持った古代ギリシアの詩人、語り部のようになりたいと希いました。声が文であつたように、表情や一挙手一投足が物語であつたように、この装丁も小説本文の一部です」

タン・カラーの膚に彫りの深い顔立ち、強く波打つ黒髪に灰色の真摯な

ひとみ

眸がそう言うってからじつとグスタフを見つめた。そのとき理由のわからない憎悪を感じる……

いまページをめくって、

「ふん」

と鼻を鳴らし、適当に開いたところで、英文を数行読んだ。

『彼は作品を創らないアーティストだった。ブロンクスの屋根裏に住み、時々チョークで古いアパートの壁や玄関前の階段に不可解なシンボルを画く。それは雨で消えた。清掃員として生涯を終えたが、彼の住まいから数千枚の草稿が発見された。それらは古ギリシア文字に似た未知の文字で書かれ、何を書き、何を意味し、何をしたかったのか、まったくわからない

かった。生涯独身だった』

グスタフは沈思した。

暫時後、黒檀の抽斗に本をしまうと、彼の私的イベントの企画書を取り出し、秘書を呼んだ。

通訳兼秘書の小沢（をざわ）・ングザ・ユーリエはコンゴ人の父とドイツ人の母との間に生まれ、ドイツ在住の日本人と結婚し、いまは別居中だった。ちなみにコンゴ共和国とコンゴ民主共和国とがあったが、父は民主共和国の方の出身だ。ただし父が生まれたときはザイル共和国であった。ちなみに母の祖父（ユーリエの曾祖父）は中国人と日本人とのハーフであった。

グスタフが彼女を選んだ理由は能力や若さやエキゾチックな美貌だけではない。

人類の発祥地と言われるアフリカの中心地にルーツを持つ人間を自分の傍に置くことに深い意義を感じていたからだ。彼の嗜好は原初と中央こそが宇宙森羅万象のアルケー（古希臘語…棟梁、原理）であると生理的に感じていた。彼は自分こそ究極の最終の哲学を持ち、なおかつ実利の世界でも成功した完全無欠に秩序と調和の美をも兼ね備えた完璧な存在である、最終の超人である、と。宇宙進化のファイナル・アンサーである、と。暗黙的に自負している種類の人間であった。暗黙に、というのは無意識的というニュアンスを含むが、まんざら意識していないわけでもなかった。

ただ公然と言ってしまつては社会性を欠くので、人前では秘めて、と言うのが正確だろう。

彼は独り言のような口調で、しかし晰らかに秘書に向かつて語り始める。「人は老いると、死を想い始める。君にはまだ想像も附かんだろうが、あたかもそれが礼節に適つた行為であるかのように、さように想い始めるのだ。謙讓の美德であるかのようにね」

彼はその言い方に含みを持たせた。つまり知っているが、納得はしていないし、まだ本気で感じているわけでもない、まだ自分自身に無理に擦り込ませようとしている段階だ、ということを暗に滲ませるためだ。

世に出る多くの人間がそうであるように彼も自意識過剰的な男であつ

た。

「やがて来るに違いないものを何とか納得したい、克服したい。そしてその本心はこうだ、死という事実を打ち消したい、不死になりたい。バカバカしいと思うだろうが、そういうことだ。人間の本心は理不尽だ。そうでなければ生きて逝こうなどと誰が敢えて思うであろうか。納得できないから食い下がる。納まらない、それが生きるということだ。そういう動機からだ。

しかし不死があり得ないことはわかっている。迫るのを理解せざるを得なくなる。死だ。堕ちて逝くのは自分だけだ。正確に言えば堕ちて逝くときは自分だけだと言うべきだろう。しかし実感はそうではない。すると突

然、いままでの人生で自分がまだ何もしないなかつたような気になるのだ。何もし得ずに終わってしまうような気になる。むしろ信仰心の強い人間はそうとは限らない。だが科学を信奉して宗教に実利性を感じなくなつた人間は動揺する。慌てて宗教に走る者もいるし、結局宗教に走る者もいる。同じだな、ふ。

死は手に負えない。家族もそれを救えない。若くて時間があるときは強気なことを言うが、いざ目の前にすればどんな人間も根底の何かが崩れる。生活を支えていたものが実は空疎で、実証がなく、死への畏怖の前では無力であつたことがはつきり、ありありと、そう、まさしくありありとわかる。壊れる。なぜ人の眼なんか気にしていたのか、何もしてくれないし、

何もできないのに。そう言う人を君は恐らく醜いと思うだろう。だがそれは君に死がリアルに感じられていないからだ。世界の関節が外れるのだ。余裕があるうちは自分だけじゃないことだから見栄を張って動揺を見せまいとする。しかしそんな見栄も、リアルな死に神を目前にすると、生きていればこそその意地なのだと悟るのだ。

畢竟、どんなことも明日生きていられることが前提で成り立っているのだ。明日死ぬのなら意地を張る意気地もなくなってしまふものなのだ。

むろん、君にはまだ理解できないだろうね」

ユーリエは打算的な考えから、

「ええ。そうですね」

と応えた。

「私が海辺の白い岩の高台に別荘を建てたのもそのためだ。むろん余生を過ごすためではない、終の棲家を楽しく普請したのではない。

芸術の舞台として建てたのだ。

私にとっては神殿に等しい。スニオン岬にあるゼウス・エナリオス（海のゼウス）、三叉の戟（トリアイナ）の神、真鍮の蹄と黄金の鬣のヒッポカムポス（海の馬）に跨るポセイドンの神殿のように。竖琴を持った歌人が神から流出（ヌース）した天啓の言葉を詠唱する舞台だ。デルフォイの巫女がトランス状態になってアポロンの言葉を啓く場所だ。

芸術家を集めるが、鑑賞者は私だけだ。公開しない。あゝ、世の人間は

所詮自分の恣ほしいま主に生きているに過ぎない。彼らの賞讃などクズほどの価値もない。自己肯定欲のヘドロに過ぎない。人を褒める者は間接的に自分の是認を行っているのだ。自己都合に過ぎない。そんな汚濁は要らない。名声など塵芥に等しい。

私は死ぬ前に、真の真実を捧げるのだ。何者にか。わからん。最高存在に対して捧げる、とでも言っておこうか。集めるのは無名の芸術家だけだ。名の知れた連中は皆、芸術を売るという罪を犯している。だから巫女のように無垢な者、清らかな処女たちを集めるのだ」

「ええ。わかっています。」

私はそのために小さな個展や合同展覧会や、くちコミで知ったアーティ

ストたちに、ダイレクトメールを送ったのですから」

「すまぬな。老いると繰り言が多くなるのだ。この企画書を委託会社に渡してくれ。修正は済んだと伝えてくれ。後は芸術家たちの主体的な企画に任せるのだ。要件はそれだけだ。下がってよろしい」

「ところで、まもなくイタロ・ヴラド様がお見えになる時間ですが」

「そうか。わかった。来たら通してくれ」

客人は正確に午後三時にやって来た。グスタフはイマヌエル・カントが毎日、正確に同じ時刻に散歩をしたため、散歩ルートの住民がカントの姿を見て時計の時刻を是正したというエピソードを想起する。

イタロ・ヴラドはメジャーと袂を分かち、自主制作する芸術家の一人で、

一部の人にしか公開されない映画を作り続け、半ば伝説化している映像作家だ。グスタフはイベント会社に委託するのみでは芸術の完成にはほど遠いと考え、彼に監理・監督を依頼したのだ。

イタロは神秘的な人物だった。生活が知られていない。住んでいる場所も国籍も。出生も正確な姓名も。ただ上映の時に現われ、消えていくのである。最近では立体映像による仮想現実映画を多く手掛けている。その完成度は高く、観た者は「ほとんど現実だ」と言って畏怖すら覚えるという。年齢不詳。数年前からインディーズ・シーンでは注目されているが、まだ二十歳くらいにしか見えない。しかしそんなはずはないのである。

白に近い薄い水色の双眸は蛇のように表情がない。長くて真っ直ぐな髪

は白に近いプラチナ・ブロンド、滑らかな大理石の彫像ように毛穴のない白皙の皮膚。整い過ぎた顔立ち。漆黒のスーツに深紅のアスコット・タイ、いつもステッキを持っている。ステッキの握り手は璧の球だった。確かにそこには長く湾曲した牡牛の角を持つ顔が彫られている。

悪魔崇拝者という噂もある。彼が悪魔の侯爵アスタロテを主人公にした映画を作ったとき、恍惚の儀式中に本当に殺害が行われたという噂をする者がいた。しかし後に殺されたはずの女性が生きることが目撃・確認され、その噂は打ち消されたが、

「死者を甦らせたのよ、ゾンビよ。だってあの顔色を見てよ……」
結局、噂の上に噂が重ねられた。そんなときも彼は、

「すべての変化は偽称です。生も死も幻影なのです。個体の識別はなく、無は存在しない。すべて思考の俎上に載せられるものはその時点で有なのです。無は思考外です。つまり知ることも知覚することもできない。だがそのように定義された時点でそれは有なのです」

そう言って冷たく不敵に微笑んだという。ファースト・ネームはイタリア系だが、ヴラドというルーマニア的な名が「ドラキュラの血統なのよ」とも囁かれたが。

「よく来てくれた。」

グスタフは手を差し出した。「葉巻はどうかね。最上のコニヤックもあるが」

「遠慮しておきます。修正・補足した企画書をメールで送りましたが」

「むろん、見た。今日中にバビロニア企画に届く」

「何かご意見は」

「いや。特にない。君は私以上に私の意向を知っているようだ。大変満足だ。ローマ皇帝よりも素晴らしい美と芸術による真実の宴が催されるだろう。最高の祭典だ」

「では、次にアーティストの配列について考えさせていただきたい。選考はあなたの考えになりますが、私からも推薦があります」

「誰かね」

「既にご存じでは。ウォルト・クリシュナ・カーマーカーです」

グスタフは目を丸くし、振り返って書籍を見た。

「こいつか！」

「あなたも一度は気になったはずです。だからこの本が書齋にある」

「ううむ。確かに」

グスタフは無名の芸術家を集めるパーティーの開催を勧めたのがこの映像作家であったことをしみじみと思い出していた。

「彼にはメニューを書いてもらいましょう。素晴らしい晚餐には素晴らしいお品書きが添えられます。祝祭を飾る美辞麗句、ことあげの言葉、ことほぎの言葉を象嵌し鏤めてもらいましょう。古代においては戦士の栄光を謳歌した語り部や吟遊詩人がいたように、記録を記してもらいましょう」

「メニューだと」

「そうです。すべては装飾です。そのような無用の飾りがあってもよいのです。余剰です。倦み疲れた贅です。駄菓子屋の彩色は退廃した精神に、皮肉で心地よい軽やかな心地をもたらず。ロココの淫画のようにね。ふふ。戯れます。」

あなたがこれから催そうとするイベントはフルコースのフレンチのようなものです。アペリティブがあり、前菜があり、主菜があり、給仕によってデザートチーズが配られます。最後には、デミタス・コーヒーでも飲んでいただきましょうか。或いはコニヤックか。贅を尽くした喫煙室に場所を変えて、葉巻を吸っていただくこともよいでしょう。それとも」

「わかった。記録もあつてもよい」

「彼の書いた『聖なる芸術家たち』はまさにこの催しに相応しいものです。続編を書かせるのです。あなたが実行しようとする計画はまさしく聖なる芸術家たちの物語です。ウォルトくんくんに小説として芸術化してもらいましょう。それは単なる記録ではない。聖化された現実です。それでこそあなたの望むとおり天上に届くものとなるでしょう」

グスタフはゆつくりと眼を瞑り、深く歎息した。感極まったようにも、諦観したかのようにも見えた。さようなことなど構わずイタロは言葉を紡ぎ続ける。

「それから海の別荘の改装にプランがあります。オープニングにはアデー

ル・イグナティウを推します。彼女が前菜です。エフィがクライマックスを飾ることに關しては、私から申すまでもなく、あなた自身が元々そういう考えでいたことと思いますが。豪華絢爛で、アグレッシヴで、前衛的な彼女こそ、あなたの欲する主菜に相応しいでしょう」

「それでは、まるで芸術家たちは私の駒こまのようだな」

「あなたの意を鑑み、謹んで反映しているだけです。私の為すこの営みもまた芸術です」

「君はまさしく悪魔のようだね」

「光榮です。よく言われることです」

「君のプランを聴こう」

「欣快に堪えません。さて、例えばアテナイのアクロポリスにおいても、パルテノン神殿のみならず、壮麗なる門のあるプロピュライアを始め、エレクトイオン、アテナ・ニケ神殿が配置されています。私は同様に、白き岩を登って高台に逝くにつれ、崇高なる神殿群の次々現われる構図をご提案します。

むろん内容は各ポジションを割り振り与えたそれぞれのアーティストに任せるのです。そうでなければハプニングがありません。芸術家たちもやる気を失うでしょう」

グスタフはしばらく黙って考えた。やがて嘆息し、言う。「素晴らしい考えだと思う。これ以上を求めることは現実には存在する世界の中では不可

能かもしれん。しかし……」

鷹揚に微笑み、イタロはグスタフの言葉を遮る。

「パルメニデスの言葉をご存知でしょう。ええ、古代ギリシアのエレア派の哲学者です。形而上学の祖とも言われます。彼は言いました、『存在は一にして永遠である』

彼は、ないものを思考することができない、なぜならいからである、と言いました。すなわち思考されるものはないと言っても名前だけで、有るものなのです。無も有り方の一つなのです。

それゆえ、思考と存在とは同一であると考えていたようです。彼の考えはこうです。

すべては初めから有り、永遠に有り続ける。よって何かが生じることはない。つまり生じるということはあり得ない。

不生（生じずに存在するもの、初めから在るから生じない）にして不滅なるもの、完全無欠なるもの（ἀτρέκεια）、動揺せざるもの、無終なるもの（ἀτελευταία）である、かつて有ったのでもなく、いつか有るだろうものでもない。それは過去も現在も未来も全体で一つとなつて永劫に連続するもので、どのような起源もあり得ない、と」

「若い頃に読んだ記憶がある」

「あなたならばそうでしょう。実務的で実業家で、行動的で、現世的な勝利者であるあなたは哲学をするような人種ではないと思われがちだが、実

際は憂鬱なペシミストだ」

「そうかもしれんな。しかし存在が思考と同じならば矛盾しないだろうか。人の思考は生とともに始まり、死とともに終わるではないか」

「いいえ。彼の、少なくとも彼の論の中では矛盾しません。彼は最初にすべてであると言っているのです。『個体の生』などという思考・概念は感覚の生むドクサ（思い込み・断見・意見・思惑）であり、死という考えも思いに過ぎず、ドクサであるということです。

すなわち死しても宇宙・森羅万象は存在する。存在し続ける。よって思考は永遠に営みを続けられ、永劫に不滅です。畢竟、死は超越される」

グスタフは息を飲んだ。

をざわ・ングザ・ユーリエはバビロニア企画が委託した下請け業者の用意した会場に行った。今回のイベントにあたって、スタッフの不足をアルバイトで補うための面接会^{いへ}婆だ。畢生の事業を成し遂げようと完璧を望むグスタフのために、バイトと^{いへど}雖も十二分に吟味されなければならない。

向かう途中、公用車から広告代理店の下請けをしているデザイン企画会社のデザイナー、^{りくび}凌空毘エリナを電話で呼び出した。

「募集のチラシ、よかったですわ」

「あ、をざわさんですか、その節はありがとうございました」

「今度のイベントで少し手伝ってくれないかしら。誰かよいデザイナーを探しているんだけど」

「広告関係ですか、ネット関係ですか」

「いろいろね。壁の飾りや建物の飾りとか庭のデザインとか、余り大手に頼みたくないのよ。ちよつとこだわりがあつてね。いままでそういう人たちとの縁がなかったから。どうかしら？」

「知り合いにあたつて見ます」

「よろしくね」

黒塗りの車を降り、すらりとして背が高く、滑らかに光沢する膚の彼女が歩くと誰もが振り返った。タクシーを降りて高速エレベーターで33階

まで上がり、絨毯の敷かれた大会議場に着いた途端、その入り口近くで言い争うカップルの言葉が耳に入った。訊きなれた名前があつたからだ。

「玲央^{れを}、あなたはさつきからエフィの事ばかり言うのね」

赤毛のカーリー・ヘアに太い眉でくつきりした眼差し、細くても芯の強そうな少女がそう言って詰め寄ると、彼は真に驚いたように眼を丸くし、ムキになつて反駁する。

「何言ってるんだ、勘違いするなよ。彼女がどれだけ素晴らしいかを語っているだけさ。彼女の芸術家としての姿勢がね」

「あら、彼女は芸術家なのかしら？ 作品を見たことないし、評論家の評価も展覧会への出品も聞いたことないわ」

「そこだよ。彼女は選ばれた人にしか作品を公開しない」

「思い上がりね。真理は万民に知られることを望むわ。本当の美なら、素直な心さえあれば、誰の魂にも響くものだわ。プロにしかわからない芸術なんてクズよ」

「そうかな、エリー。野球やゴルフには達人にしか見抜けない凄さがある。ジャズもそうさ。だからこそ奥が深くて面白いんじゃないか。真の芸術は大衆に理解される、なんていうのは幻想さ。食べることや“寝る”ことにしか興味がない連中に真実が見えるはずがない。

彼女は芸術を理解した振りをする人間に見られることを嫌うし、蒙昧な人間に評されて穢されることを忌む。彼女が客を厳選するんだ。彼女は芸

術の女神であつて、名声も富も求めない」

「大金持ちだからそんなことができるのね。皆食べるために必死だわ」

「古代ギリシア人は『労働は（魂を）疵にする』^{きず}と言つた。まさしくそのとおりさ」

「でもそのギリシア人はペストが流行したとき、刹那的な享樂主義に走つたわ。ペリクレスのいたあの最盛期の、ペルシア戦争で勝利して精神的頂点にあつたと言われるあの時代のギリシア人がよ」

ユーリエは嘆息した。確かにエフィに就いて言えば賛否両論がある。彼女は尊大だし、常に女王然としている。だが才能が本物であることも確かだ。

会場に入る。アルバイトの希望者は一人ひとり名前を呼ばれ、控室から出て来て十数名の審査員のならんで坐る前に立たされ、質問を受け、そしてじろじろと見られるのである。

芸術に理解のある者、興味・熱意のある者でなければならない。どんな雑役の人間であつてもそうでなければならない。隅々まで芸術の魂が行き届いていなければならない。そうでなければ完璧とは言えない。

採用された者の中には牛エンの名前もあった。Ass (Art Supplement Staff)、仕事の内容は清掃や簡単な装飾などである。時刻によってはウェイトレスをやってもらふこともある。

和歌山は驚いた。東京駅構内の新幹線乗り場の前に集まって来た職人の数が余りに多かったからだ。東海道新幹線の入口の前で、改札から数十メートル離れた場所だった。

「おい、日高、こりや、どういうこった」

「俺にもわからないです」

「どうしたんですか？」

事情の见えない白崎しらさきが尋ねる。

「おまえはまだわからないだろうが」 そう応えたのは、由良ゆらだった。「ここにいる連中は小さな工場の職人で皆顔馴染みばかりだ。業種はばらつき

があるが、電気工や内装工が多い。俺が言うのも何だが、腕のいい奴らだ。

建築の仕上げのときにしか顔を合わせないが」

「行先は同じなんですかねえ。だとしたら、何でわざわざ呼び寄せるんですかね。現地にだってそれなりの職人がいるだろうに」

「わからねえな。J Mの社員から直接依頼があつたんだ。あそこが直接発注するわけがないから、どつかが請け負つてるはずなんだが、ここにいるのは下請けばかりで、元請がわからねえな」

「地元の業者じゃだめだったってことなんでしょね」

「それとも地元も雇って足りなかったのかもしれないねえ」

「おい、佐々木、佐々木じゃねえか、ほら、あれ、電気工の佐々木だよ」

そう呼ばれた男は頭を搔きながら近附いてくる。

「やあ、和歌山さん、久し振りだな。和歌山に行くのに和歌山さんに逢うなんてな」

「つまんねえこと言ってるなよ。やっぱり行先は同じか。おかしな話だ。まあ、いいや。それよか、おまえと一緒に、あのスーツの男は誰だい？」

「商社の人さ。時々そこから電気工事で呼ばれるんだ。納品する機械の設置関係で呼ばれたんだ、今回は」

「へえ、何の機械だい」

「いや、それがさ、俺にもうまく説明できないんだ」

「いい加減な野郎だな。説明できないものの設置を引き受けたのか、職人

の風上にも置けねえや」

「いやいや、詳細はメーカーの人も来ているから。ほら、あの外国人さ。今日、飛行機で着いたばかりなんだ。大変な量で空輸代金も相当なもんだが、手続きもかなり長くかかったらしい」

「へえ。それにしてもおまえら道具は」

「和歌山さんだつて手ぶらじゃないつか。いや、道具や機材は秋にトラックで輸送したんです」

「俺らもそうだよ」

一行は大阪でさらに十数人の職人と合流して和歌山県へ向かい、現地でまたさらに数人の職人と合流した。

第一樂章。前菜。

『青天の霹靂のごとく、第一の章は唐突に、天穹の瓦解せし時代の崩落のごとく始まりぬ。巨石の転ずがごとき大瓦解の重低音が、いずこまで広がるかわからぬほど、火砕流のごとく拡がり、迫真す。されどそは突然無音となり、やがてその無の闇より、儚く微かな歓び、希望を孕ませつつも、その底流に先ほどの巨大なる暗黒の層を潜め、すなわち波瀾の予兆を膨らみ、時に静まり、時に不安の陰翳を過らせ、人心を安堵と恐怖とに移ろわせて駈る。もしその堰破れ、土石流なる大暴濁流の氾濫せば、神の熾した

もうた大洪水のよう、一切を無空に帰させずや。さなるときノアの方舟たるはただ芸術のみ』

ウォルトは数十年前の中古のフィアットの⁵⁰⁰（チンクエチエント）を走らせ、海沿いの国道を走り続け、県道に折れて、さらに市道に入り、左折して登り坂の私道に入る。白い岩の丘に阻まれて見えないが、海がかなり近いらしい。車は灌木の繁るその白き丘を登っているのだ。

頂上に着くと、三つの棟のファサードが見えた。それはまるで大聖堂のようであった。

建物の前は広いロータリーになっていて、ロータリーの中心には大きな白い器のような装飾的な花壇があり、真つ赤な花が咲き乱れている。既に何台かの車が停まっていた。車は高級車か、クラシック・カーしかない、ように彼には見えた。

ロータリーからファサードまでは真つ赤なカーペットが敷かれている。車から降りた人たちがそのカーペットを次々と歩む。車のトランクから荷物を下ろして運ぶアーティストたち。小説家は身軽だ。機材も道具も衣装も楽器もない。タブレットがあればそれで十分。ネット環境があれば資料もいらぬ。などと思ひながらウォルトはカーペットに負けないくらい真つ赤なクラシック・カーのガブリオレに気が附いた。アデルだ。車は

ブガッティ・タイプ 55 カブリオレ、1932年製。

演奏家や仲間たちがそれぞれの車から降りて荷物を下ろす。エイトは60年前のフォルクスワーゲンのマイクロバス（フォルクスワーゲン・サンババス）を運転して来ていた。荷物がたくさん詰めて便利だ。しかも容姿がポップで可愛い。

イタロはロールス・ロイスのコーニッシュ・コンバーチブルに乗って来る。コーニッシュとは南フランスの海岸道路の名で、世界中の王侯貴族がリゾートで過ごすためにシルバー・シャドウをベースに作られたものである。まさにこの場所に相応しい気品を湛えていた。彼は無造作にカーペットを速足で歩む。

こうした貴卑大小新古鮮漠明暗濃淡の様々な様相を示す芸術家たちの立ち振る舞いや身なりや車など、或る意味で百花繚乱とも言える眺めで、作家の感覚をいたく刺激した。ウォルトはタッチパネルのキーボードを打ち、この様子を書き留める。物語のオープニングに相応しい場面のように思えた。

「さあ、行こう」

ウォルトは意を決して歩んだ。車はボーイたちがモータープールに運んでくれる。

そのとき、公道を走ってよいのかと疑いたくなる、レーシング・カーのような物凄いスーパー・カーが急停止した。パガーニ・ゾンダ・チンクエ・

ロードスターだ。女性が颯爽と降りる。

深いボルドー・カラーの服を身にまとい、皇帝のようにレッド・カーペツトを踏むのは、エフィ・イリニ・アレハンドロ・パパナシュだ。

緑の眸のエフィは画家としてスペイン人の貿易商とギリシア人のフラメンコ・ダンサーの間に生まれた。家は非常に裕福で画家として活動を始めたが、まったく評価されなかった。絵を買いたいという者もいなかったが、絵を売ろうとしたこともなく、すべて自分のアトリエに飾ってある。最近では、造形美術に興味を持ち、彩色彫刻やオブジェも創っている。

彼女の車の後を米軍が正式採用する High Mobility Multi purpose Wheeled Vehicle 略して HMMWV(ハンマー)が数台続く。まるで戦争だ。

彼女のスタップらしい。ここから既に演出が始まっているのだろう。

その後を彼女の取り巻きの車が次々、レンジローバー、イソッタ・フラスキーニや1950年代のインパラとピアスアローとコルベット、さらにブリガッティのヴェイロンやフェラーリのエンツォ、メルセデス・ベンツSLRマクラーレンやレヴェントン、アストンマーティンOne-77やランボルギーニ・チャイナリミテッドエディション (LP670-4SV)、ケーニッグゼグ・アゲーラRやマクラーレンF1、ポルシェ918スパイダーなどのスーパー・カーたちが続く。

エフィが荷物を運ぶアデルを追い越すとき、体が触れないのにアデルがよろめいた。エフィを振り向くことさえなくそのまま建物に入る。

「何て失礼な奴だ」

エイトが声を挙げる。しかしアデルは、

「いいのよ、何でもないわ。実際、体はぶつかってないのよ。私がバランスを崩したただけだわ。彼女のオーラに煽られたのね」

「誰なんだ」

「知らないの？ エフィ・イリニ・アレハンドロ・パタナシュよ。画家、彩色彫刻家、総合芸術作家よ。さあ、行きましょう」

「真ん中の建物でいいのかな」

「そうね、彼女もそこに入ったわ」

数段の大理石段を上るとアーチ形の入口は上部にトレーサリー（狭間飾

り）があり、ステンドグラスが嵌められていた。中は広く、まさにゴシック時代のカテドラルのような上昇感のあるリブヴォールト（穹窿）天井は崇^{たか}く神聖ですらあった。

「凄い」

アデールが感嘆した。

「まるで映画か、世界遺産だな」

演奏家やエイトなどの仲間たちも息を飲む。

身廊をそのまま進むと、中央にクーポラ（球天蓋）があり、その先に行くと、最奥の祭壇のあるべき場所には何もなく、大きく出口が開いていた。

「おお」

再び皆、感嘆する。

海だ。

遠く水平線が見渡せた。

ここが高台であることがよくわかる。そしてここから先が急激に落ちる岩の崖であるからこそこのような見晴らしがあるのだ。

すなわち別荘は海に面した高台の上にある。百数十メートル直下は紺碧の海だ。岩にあたる白波の音が遙か下から轟いている。とは言え、海全体は紺や青や蒼や藍や碧を交えて輝き透き、静かだ。崖は石灰質で、ニースなど南仏を想起させる。

「奇観ね」

アデールが呟くのも無理はない。

彼らの足下に数十棟もの建物が崖を下り這う龍のように連なり繋がり建っていたのである。それぞれの棟が階段のある渡りで急勾配を連繋しているのだ。まるで海鳥の棲家だ。

実際、崖は直壁ではないものの、白い巖が凸凹しながらもきつい角度で海に落ち、雰囲氣的には断崖絶壁と言いたくなる威容であつたから、概ねそれに添うように建つ建築物群は、いま彼らが立つ場所から見ると、海に向かつて急降下する、視覚に刺激的な基本構造となっていた。

ただし降下は直線的ではない。各棟又は各フロアは複雑に枝分かれし、大小長短、四角形や八角形や菱形や円形など様々な形状や、平屋乃至三階

建て、又は建築様式の若干の差異（ただし全体的にはニースやモナコの屋敷のように、素焼の屋根瓦や明るい色調の壁など、光あふれる海沿いの南欧風の、乾いた明晰さを醸している）などもあつて、あたかも岩場をつかむ節くれ立った龍の手と龍爪のようにも見えた。

だがもしこれを指に例えるなら、親指だけが立っているような呈であると言えよう。

すなわち建物は全体に下っているが、一岐支だけがさらなる神々しい高台の岩の尖端へと昇っているのである。その丘は100メートルほど離れ、現在地から右手に位置する場所、西側にあつた。

ちなみに東側も低い丘で、鬱蒼たる木々に蔽われていて、鳥居の上部と

檜皮葺の屋根が見える。唯一と言つていい、木造建築であつた。別荘の建築以前、昔からの神域である。絶景の場所でありながら、いままでは土地の者が他所人を入らせなかつたのも聖地ゆえであつた。

古代日本では景観の奇しく佳き場所には自ずから神威靈威が宿ると考へられ、かような場所に來たときは禍を蒙らぬよう言祝ぎ讃えるための歌を献じたものである。現代人が考えるように風景を愛でたわけでは必ずしもない。人の多くが何事も自分の感性に当て嵌めて判断してしまうのは意図的ではなくとも慢心であると自戒すべきである。

さて、眼を転じ戻す。

西の高丘には、アクロポリスのような古代ギリシア風の神殿があつた。

「あそこには神様が祀られているのですか」

アデルは傍にいた美化作業員に尋ねた。花壇を整え、祈りの言葉を書いた美しい額を添えているところであつた。牛エンだつた。

「あそこには、アポロンの大理石像と、象牙と黄金によつて造られた女神アテナの像があります。あそこへ登るまでの途中にも、いくつもの大理石の建物群が見えると思いますが、そのうちのいくつかは最高神ゼウスや海神ポセイドンや戦闘神アレスや美の女神アフロディーテが祀られています」

アデルは牛エンの濃い栗色の瞳と少し欧風な顔立ちと明るい茶色の髪をしみじみ見つめる。

「あなた、以前、Azur（あずる）でやった展覧会で見かけたわ」

「はい」

「日本人だと思っていたけれども、そうでもないみたいね」

「父はベトナム人で母は韓国人でした。父の祖父はフランス人でした」
はにかみながら俯く。

「ああ、そう」

アデルはそれ以上問わず、丘を再び眺める。

神々しい高台の頂上からアデルたちがいまいる地点までは高低差
40
メートルくらいだろうか。丘の麓はすり鉢状の小規模な円形劇場で、舞台
の背景が祭壇で、その周囲は路が廻り、頂上へ登る路に繋がっていた。登

路の入り口には凱旋門のような門が造られ、深紅の大きな布で覆われている。

「開催の日まで秘めておく趣向かしら」

髪を風に弄らせ、アデルがそう呟く。

布は海の風ではたはたとひらめいていた。高さが白丘の中央にまで届く大きな門だった。

「あなたに会えるかもしれないと感じていました。会えて凄く嬉しいです」
アデルたちが去ろうとする刹那に牛エンは言った。アデルが振り返る。

「ありがとう」

そのとき案内係の青年が現われた。

「申し訳ありません、アデル様ですね。それにエイト様。案内が遅れてすみません。いまの時間、ご来着の方が集中してしまったので」

「いいわ。大丈夫よ。ゆっくり様子が堪能できたわ。では、お願いします」と言ってから振り返り、

「あなた名前は。私はアデル・イグナティワ」

「あ、知っています。わ、私は中エン・ユンと言います」

「よろしくね。じゃあ、また」

「はい」

「あなたね、リクビ凌空毘エリナの紹介で来てくれた人」

「はい、そうです。をざわさんですね」

ともなしりさあ
友梨梨沙亜はそう応えた。

「スタッフ用のスマートフォンを受け取った？　もしまだだったら各セクションのチーフからもらってね。それから聞いてると思うけど、この建物や敷地の案内板や表示、刑事やメニュー看板なんかをちよつとデザインして欲しいのよ。」

既にデザインしたものがあんだけどね、どうにも気に喰わなくて。そうしたら案の定、その、オーダーまでもがダメ出しでね。

ふう。何でも自分の手で、大手に頼まないってのもなかなか難しいものね。ともかくすべてをアートにしたいのよ。生活の細々したモノや施設設備や備品もね。もともと世界のすべては神様の創ったアートなものね」

そう語りながらも、梨沙亜が遠くを見ているので、ユーリエはその目線を追う。エフィがいつものよう颯爽と歩いている。

「エフィ・イリニ・アレハンドロ・パタナシュよ。知ってるの？」

「あ、ええ。すみません。最近彼女の私的な図録のデザインにかかわったものですから。こんなところで逢うなんて……」

「それは奇遇ね。彼女、才能あるけれども無名の芸術家よ。いまのところ、敢えて無名でいることを選んでいる、って言った方が正確なのかもしれないな

いけれども。だから彼女のお眼鏡に適ったんなら、あなたを推薦した凌空毘の審美眼も信頼できるってことね」

「でも、エフィからは結構ダメ出しがありました……」

「気にしないことよ。彼女は気難しいわ。最終的に採用されたんでしょ？　それで十分じゃない」

「ありがとうございます」

午後4時。

牛エンは三日前からここにいたが、アルバイト仲間で仲良くなった人は

数人だった。チームで仕事をすることが多いのに、何となく馴染めないのだ。しかし玲央という青年とは少し気が合った。自己主張もしないし、癖もなく、細い眼に涼やかな顔で、大人しく、牛エンの感性を苦しめない。ペアでやる仕事はなるべく彼と組みたいと考え、自然とそうなるように努めた。いまでも一緒にテーブルクロスを敷く作業をしている。食器や銀器やナイフやフォークをならべる仕事は専門のアルジャンティエがいて、彼女たちはやらない。ひたすら純白のシーツを敷くだけだった。

「玲央さん、元気ないですね」

「ううん、彼女のことだね」

玲央の恋人もここでアルバイトをしている。パテシエの仕事だ。

「ああ、この前の女性ですか？ 何となくそうかなって思っていました」

「うん。別に喧嘩じゃないけど」

「玲央さんが喧嘩するなんて思いもしませんよ。彼女さんの体調が悪いとか、病気とかですか」

「いや。いや、或る意味、そうかもしれない」

「え？」

「何でもない。さ、早く終わらせよう」

そのときだ。

「何話してたの！」

エリーだった。牛エンにつかみかかりそうな勢いだ。

「私は別に」

「この泥棒猫！」

……そういう悩みか。牛エンは納得した。少しほっとしてくすつと笑いそうになったが、エリーの表情を見て怖気が走る。修羅。まったく以てそういう面相だった。奇妙に顔が歪み、赤黒く変色している。双つの眼が眇めになって何かに憑かれたように正気がない。恋愛の嫉妬は子孫継続に繋がる重要な本能だ。たとえ破滅しても成し遂げようとする狂気の感情に人を走らせる。すべての憎悪は生命を奪われまいとする感情を発端とするが、自己の存続とは畢竟、子孫の継続に繋がるのだ。

その夜は壮麗なパーティが催された。ドン・ペリニヨンの泉があふれ、

その泡沫が光の海を生み、キャビアの宝石が無数のクリスタル・グラスに煌めき、牡蠣の山が築かれ、大きなスプーンで雲丹が山盛りに掬い取られ、フォアグラやトリュフ、フィレ肉や鴨肉、シャトー・マルゴー、ロマネ・コンティなどの赤ワインにコニャック、スペインのシェリー酒やギネス・ビールなどが運ばれる。

レセプションの途中でグスタフがマイクを握った。

「芸術の頂点を目指すのだ。かつてフランス革命の時代に称揚された最高存在を、解釈し直す試みと言ってもよいだろう。聖なる祭典の日は一週間後だ。歴史上類を見ない。しかし私はそのようなことはどうでもよい。一切の地上的な価値観は死の前に虚しい。はつきりそう言い切ってしまう。

それさえもうどうでもいい。挨拶など繁文縟礼だ。そんなことよりも、この祭典について事務的に説明しよう。

ルールは簡単だ。誰でもその日に自由に作品を発表できる。君たちは自分たちの作品を演じ、置く。公開するのだ。表現者だ。パフォーマーだ。同時に他のアーティストたちの作品を楽しむ、観客だ。オーディエンスだ。芸術家たちだけの純粋なる聖なる真の祭典だ。費用は全額こちらが負担する。事前に通告したとおりだ」

翌日から27組の芸術家たちは与えられたアトリエで準備を始めた。アデールはスタジオ附の棟を与えられ、演習を始めた。時折、ドアや窓が開放され、静かなラテンのリズムと哀愁を帯びたメロディと優しい歌が聴こえ

た。

二日が過ぎた。

次第に仲の良いグループなどができ始める。グスタフは毎晩パーティを催し、参加したい作家たちだけが参加し、他は準備・製作に励み、また外出しては気分転換などする。パーティや食事をもにし、様々に議論した。

三度の食事は海を見渡すテラスのある大きな食堂でメニューから好きなものを無料で注文できた。ランチを食べながら海を見下ろし、語り合った。アデルのグループは十数名に膨れ上がった。その中には牛エンがいた。彼女の素直な崇拜をアデルは可愛く思った。

芸術に就いて頻繁に語り合うようになる。

「いつかユーラシアを歌いながら旅したいわ」

黄金に燃える深い黄昏のテラスで海風に吹かれながらアデルは言った。

「何のためにか？」

グスタフはイタロに訊いた。

「むろん社交辞令です。世の中には美辞麗句が必要なのです。贅沢な楽しみです。余分、余剰です。嘘の綾を絡めて遊び、悲嘆を舐め尽し、憎しみの悲劇を堪能し、恨みを愛でて鑑賞する。逸楽の精神、佚しむ余裕たのですよ。

だから贅なのです。

社交辞令はそのための技法です。メソッドです。ふふ」

「くだらん。

そんなものは永遠に生きる君らのような種族に遺して擱こう。

私はもうそのようなことに関わる気がない。そのようなものは幻だ。人が抱くすべてはな。愛すらも、そう、家族への愛すらもただの生理現象に過ぎない。

ましてやそれ以外の感情など、余分な感情に過ぎない。贅肉だ。すべては明日があるから成り立っているに過ぎない。明日がなければすべては意味を喪う。これは経験した者にしかわからない。死によって、明日がない

ことによって、生活の根源が喪われるのだ。生活の根本が瓦解するのだ。すべてが無意味であつたことに気が附く。そう、まさしく一切は社交辞令だつたのだ、と。

すべて他人の心情など信用できない。すべては他人事だ。すべての人間にとって他人の死は他人事なのだ。死は独りで死んで逝くしかないのだ。だがそんなことを人に教えても何にもならない。どうせ真に覚るのは本当に死ぬ間際だけなのだ。だつたら死ぬその刹那までせいぜい虚ろな傀儡を信じて真剣に求め焦り口惜しがり憤り歓喜し泣き笑い生きていればよいのだ。そして死ぬときに何もかもが抜殻であつたことに気が附きて愕然とし、動揺したままで混乱のうちに死んでいくのだ。それしかない」

牛エンは休憩時間にアデルのスタジオに入って練習を眺めていた。扉は開放され、窓も開け放たれ、11月でも暖かく、乾燥しているし、風も人も出入りは自由だった。

深い魂の歌であるカンテホンドやファドを歌うアデルの汗に見惚れている。

「食事にしない？ ここのカフェやレストランは最高ね。まるでエーゲ海に旅行に来たみたいだわ」

そう言ってアデルが牛エンを誘った。海を見下ろすテラスの席。断崖

の下に潮騒、遙か見渡す碧い海。バー・カウンターではカクテルをシェイクする音。バーテンダーがアデルにウインクする。

「バーテンダーもシェフも素晴らしいわ。厳選したって感じね。芸術家をもてなすのに細心の注意を払ったって感じよ。とても満足してるわ」

そこへ、取り巻きを引き連れて燦然たるエフィが入って来た。いつものように女王然と。気兼ねも気遣いも席に坐り、カウンターの隅でデザートを用意していたエリーに向かって、

「今日はブルーベリーのケーキをちょうだい」

パテシエの顔が悔しそうに歪む。牛エンには何となく状況が推察できた。憎悪に満ちた顔でケーキを運ぶ白い服と帽子のエリー、玲央の恋人、乱暴

というほどではないが、粗雑にテーブルに海洋模様のケーキ皿を置く。

「ありがとう」

面白そうに微笑みながら言うエフィ。何という女だ、彼女はすべてお見通しで、人の恨みや妬みを楽しんでいる、中エンはそう思った。すると、中エンやアデルの方を向き、

「あら、あなたたち、えーっと、アデルだったかしら」

「そうよ、何なの、エフィ」

「あなたには節度というものがないのね」

「どうということ」

「窓を開けて練習するのは止めてくれないかしら。せつかくの防音スタジ

才なんだから使いなさい。あなたの旧態然たる音楽を聴いていると退屈で死にそうになるのよ」

「そう？ 魂の歌よ。残念だわ」

「つて言うかさ、ネタばらしして楽しいの？ こんなに毎日、聴かされたんじゃ、祭典の日が来る頃には、もう飽き飽きしちゃう。げんなりしちゃうわ。聴きたくもなくなるわよ。もうちよつと企みつてもものがないの？ 意外性とかさ」

それを聞いてアデルは企みある笑みを浮かべ、

「ふーん、芸術はそんな小手先の物なの？ 秘めておいてわつと驚かす？ バカバカしいわ。そんなのただの絡繰りじゃない。ただの仕掛けよ。あざ

とすぎない？ それじゃ、まるでトリックじゃない。芸術はただ魂を撃てばよいのよ。考えるべきじゃないわ」

しかしそう言う彼女の眼には、なぜだか悪戯っ子の輝きがあつた。

「浅薄ね。そういうコンセプトもあつていいのよ。そう言えば、あなた、掃除している娘ね」

今度は牛エンを見て言う。それは奴隸を睥睨するアッシュユールの王か、ペルシアの皇帝のようであつた。

「ときどき海の方を見ながら、水彩を画いているでしょう。止めといった方がいいわ。あなたの絵はギャラリーの隅っこに放擲するしか価値のない存在よ」

そう言つて背を向ける。美しい背中を見せる長いドレスを引きずりながら。

牛エンはその言葉に午前中の出来事を想い出し、ドキツとした。休憩時間に岩に坐つて海の絵を画いたときだ。美の神のような、極東の地の民と人類の起源地の血との混ざつたユーリエが来て傍らに坐つた。静かな時間だつた。

「いい絵を画くわね」

「そんな……。つまらない絵です」

「そう？ 私はその方がリラックスするわ。素朴だからつて言葉にしてしまふとつまらないけれど、つたないから安心できるつて場合もあるのよ。」

ごめんなさい、こんな言い方って何だか上から目線よね。私は絵なんかまったく画けないくせにね」

「そんなことはありません。ありがとうございます。けど、素材がいいんです。ここが素晴らしい場所だから。どうしても自分の筆で書き留めたくて壊してしまいそうで少し怖いけど」

「ふふ。素材を生かすのは料理人の腕なのよ。もしよかったら、あなたも作品を展示しない？」

「ええっ！ 無理です。私なんかとても無理です」

「遠慮しなくていいのよ。置くといっても隅っこにね」

そう言われて中エンの顔に少し影が差した。ユーリエは弁解するように、

「そう意味じゃないのよ。敢えて隅っこに置かせてほしいってこと。その方が何かを強く訴えられるような気がするのよ、あなたの絵なら。」

ね、気を悪くしないで、考えておいてね。あら？」

「どうしたんですか」

「ううん。何でもないわ。じゃ、またね」

牛エンがユーリエは見ていた方を見ると、一人の女性がエフィのアトリエを覗いていた。アトリエでは白い髪のイタロがエフィに何かを説明していた。その様子を外から覗き込むように見ている人は……

エリーだった。

部屋を覗くその表情はつい先日、牛エンに見せた嫉妬の鬼相と同じだっ

た。凄まじい情念を感じる。髪乱れ、怨霊のようだった。しかしその日の海辺の別荘は静かで、開けられた窓からはエフィの声とイタロの声が聞えた。

「ミスター・ヴラド、それでも愛がすべて。愛が一切を創り、在らしめるのよ」

「ふ。」

しかしあなたはすべてを赦せるでしょうか。もしあなたに愛することもがいてその子が猟奇的な中年男に興味で虐殺されたらその男を愛し赦すのでしょうか。それは正しいことなのでしょうか。あなたの自己満足であって、殺された者は救われないのではないのでしょうか」

そう言つて贅沢なお世辞でも言つたかのように欣然と微笑んだ。エフィは超然としていた。

「それつて『カラマーズフ』のパクリね」

瓦屋根のすつきりした古色ゆかしい山門をくぐると、木々に深く囲まれ緩やかな坂をなして登る参道、やがて城郭のような（巨きな石は使われていないが）石垣が見える。石垣の上には白い土壁があり、瓦屋根が庇をなす。先程よりは急傾だが短い石段を登り、立派な山門を見上げた。興国寺こうこくである。

和歌山の由良の鷺峰山興国寺（和歌山県日高郡由良町門前八〇一）は臨濟宗妙心寺派の寺院であるが、創建当初は西方寺と呼ばれた。尺八が宋から伝来した地と知られ、同じく宋伝来の味噌から醤油が発祥した地とも伝えられる。

建保7年（1219年）1月27日、雪が積もる八幡宮にて神拝を終え、退出するとき、「親の敵はかく討つぞ」と叫ぶ公暁に源実朝は暗殺された。場所は石段とも石橋とも伝えられ、石段の大銀杏に公暁が隠れていたとも言われるが、いずれも信憑性乏しく後世の創作と考えられる。『承久記』には一の太刀を笏で防ぐも、二の太刀で斬られ、「広元やある」と最後に言って斃れたという。公暁は実朝の首を持ち去り、食事のときも手放さな

かった。翌28日、御家人百余名が出家し、遺骸は首が見つからぬまま勝長寿院に葬られた。

渡宋を命じられていた葛山景倫も又報を聞いて、菩提を弔うために出家し、戒名を願性^{がんしょう}として和歌山県伊都郡高野町高野山にある金剛三昧院の僧となる。

ちなみに金剛三昧院は建暦元年（1211年）、実朝の生母である北条政子の発願により源頼朝の菩提のため、禅定院として創建され、その後、実朝の死を機に改築して金剛三昧院と改称し、代々將軍家の菩提寺とされた寺院である。

政子に忠誠を認められた願性は、その報いとして現在は興国寺と呼ばれ

る寺のある由良莊の地頭に任命され、安貞元年（1227年）、真言宗西方寺を創建し、正嘉2年（1258年）、金剛三昧院で知り合った心地覚心しんちかくしん（法燈国師）が宋から戻って来たのを機に、実朝とその頃既に没していた政子の菩提を弔うため、西方寺住職として心地覚心を迎えて開山とした。心地覚心は普化尺八を奏する居士を宋から連れ帰り、興国寺に住まわせたので、以後、普化尺八の本山的な存在となった。弟子の一人、虚竹禅師（寄竹）が尺八の元祖と言われている。又宋で習得した金山寺味噌の製法が人々に伝わり、醤油誕生の契機となったと言われる。

その後、後醍醐天皇より寺号の興国寺を賜った。紀伊之国十三仏霊場第8番。文化財として木造法燈国師坐像、絹本着色法燈国師像、紙本墨書誓

度院規式を有する。本尊は釈迦如来。由良には万葉の故地があり、次のような歌が残っている。

大宝元年辛丑の冬の十月に、太上天皇・大行天皇、

紀伊の国に幸す時の歌（巻9・1668）

白崎は 幸^{さき}くあり待て 大船に 真^ま楫^{かぢ}しじ貫^ぬき またかへり見む

「白崎は航海の無事を祈って待っていてほしい

大きな船に真楫を付けて行くのだから

無事に帰って来たら復たこの白崎を見よう

」

乾いた汐風が爽やかに吹き抜け、碧い海を見下ろすプライベート・バーで、正午からカクテルに痴れ、グスタフはバーテンダーに向かって独り語っていた。

「死とは何か。生とは何か。

何を語ろうが言葉に過ぎん。

人がそれを言葉で “概念” として感得して、いったい、何を得るのだ？
いったい、概念とは何だ。そもそも何の役に立つのだ。脳内に神経伝達物質を分泌させて、納得や満足の感情を神経に起こさせるに過ぎない。

人が言葉で覚りを得て最初にすることは何だと思うか。

他人にそれを表明することだ。そうやって、捏造された価値観の中での評価を得て、あたかも自己が肯定された存在であるかのように錯覚する、それをまず為す、それが最も重要だからだ。だが虚しい。空疎だ。何の実体もない。そもそも物事を評価する「実体」という価値基準（実体であるか、否か）は何なのだ。どうしてその基準なのか。基準のかたちが選ばれた根拠は？ 基準とは何か？ その設定には何なのか？ その設定がそのかたちで決定された理由は？

我々はあたかも智慧であるかのように語っている。しかし現象としてはアミノ酸（グルタミン酸、 γ -アミノ酪酸、アスパラギン酸、グリシンなど）、ペプチド類（バソプレシン、ソマトスタチン、ニューロテンシンな

ど)、モノアミン類(ノルアドレナリン(ノルエピネフリン)、ドーパミン、セロトニン)とアセチルコリンなどの神経伝達物質によって特定のイオンチャネルが開かれ、神経細胞(ニューロン)の細胞膜内と外とで電位の差が逆転する電気的な発火現象(インパルス)が起こっているに過ぎない。

そしてそれは各々の特性によって人間の神経に特定の現象を起こす。

例えば神経伝達物質としてドーパミンを放出するドーパミン作動性ニューロンのうち、赤核後方部(RRF)の中脳辺縁系投射をするドーパミン作動性ニューロン(A8細胞群)はA10細胞群とともに大脳辺縁系(人間の脳で情動の表出、意欲、そして記憶や自律神経活動に関与している)に投射し、中脳辺縁系を構成する。そもそもドーパミン作動性ニューロンは

中脳辺縁投射、中脳皮質投射を形成し、これらニューロンの活動は報酬予測に関わっていて快の感覚を生むと考えられている。

我々が諸考概を理解したと感じるとき、快の感覚を得るが、了解や理解などとは突き詰めれば納得の感に拠る快とも言える。ただの物的な現象だ。いったい、これは知なのか？ 無知で知らない。物質だ。非知だ。宇宙開闢以前だ。無知らない。

つまり我々は知っていても実際、何も知らない、と言うか、知っているということは非知であるということなのだ。非だ。

とすれば、かような批判は何なのか。という批判も又。
ふ。

堂々巡りだ。

結局、私も同じ罍に嵌まっているのだ。だが他人にどう思われ、どう評価されようとも、それが何だと言うのか。そもそも人は皆、自分の都合で他者を評価したり貶したり憎んだり愛したり批判したりしているに過ぎない。何よりも彼らも私もともにいずれ亡んでしまうというのに」

白い岩にしがみついて配線をしていた職人が唸った。

「しかし凄ええ眺めだな」

「え？」

「いや、神殿だよ。白い大理石でさ。まるでギリシアだよ。岩も白い石灰質だしさ」

「でも崖を落ちて行く建物群は南欧の高級別荘風ですよ。ま、どっちにしろ、日本っぽくはない雰囲気ですよね」

「あゝ、そうだ。不思議な気分になるな、仕事していても」

「しっかりしてくださいよ、せめて仕事してるときは。ほら、あそこ、見てくださいよ」

「ありや、アンカーでも作ってそこから命綱張って。それで作業するしかないな」

「命懸けですな」

「そうさ。だから間違えないでくれよ、岩のところは白いカモフラージュの物、灌木のところにはオリーブ色のものを使うんだ」

「もうわかってますよ。自家発電機へのルートはできたんですか？」

「できたらしい。音がしないよう地下に埋める作業が難航していたらしいが」

「停電のためなんでしょうか。あんな大容量のものが必要なんですかね」
「そうだな。しかも数か所に。まるで分電盤が破壊されるとでも思っているようだ。予備の“基地”がいくつもある」

「いったい、何が起ころんですか」

「わかるはずもない。すべてわからないことだらけさ。仕事を粛々とする

しかない。どうせ、何が起ころうが、俺たちにとっては大したことじゃない」

「そうですね」

海風に吹かれ、健康に笑った。

黄昏時のテラスでアデルが髪を靡かせ語った。

躍り乱れるように立ち昇るシャンパーニュを傾けていた。

「美しい柔らかな、微妙な色彩で、完璧に欠かれた日本画の上に、濃い墨を使って、くつきり太い線で輪郭を描く。墨痕を遺すの。そういう異の効

果って、何かりアリティがあるのよね。ギターでもハーモニや音色や旋律の美しさじゃなくて、金属の弦をゴリゴリする快感。物的な質感っていうのかしら。そういうのって何かりアルを感じるの。ヴィヴィッドな感じをね。

意外性、違和感、他者の感じ、ってことかな。人はいつもそれを求めている。淑女が淫売に変わるようなものね。ふふ。

墨痕って言葉、好きだわ。ミシマの小説で見つけたの」

牛エンはうつとり彼女を眺めた。海を背景に絵のようだ。

これを絵に描き留められたら、どんなにか幸せだろう、と牛エンは思った。そんな風に絵を画いて日々暮らせたらどれほど幸福だろうか。これか

ら自分はどうするつもりなのか。どうしていききたいのか。あたりまえな答なら持っている。けれどもそれは本当の答ではない。画家になりたいのか。そうかもしれないし、そうでないのかもしれない。そもそもなれるわけない。もしなれたとしてアデールはどう思うだろう。彼女は歌で稼いでいない。芸術は神に捧げるもので芸術を売ることをよしとしていない。彼女は働いて凌いでいる。彼女は才能があるのに無名で終わろうとしているかのようだ。多くの人が無名で終わる。私もそれでいい。でも私の場合はそのつもりがなくても無名で終わる運命だ。偉大でも何でもない。まさしくただの無名だ。多くの人と同じように。草や花や木や虫や鳥や水や空気のように。世界のほとんどすべてのように。終に見られることすらなく終わる。

あゝ、もし誰も見なかったとしてもアデルは美しい。その美しさは存在するだけで永遠だ。生きている芸術だわ。

理不尽で無明な、ただ力だけの世界、ただ物的な現象でしかないこの世界に輝かしい睿智のランタンを灯すのはアートだけ。混濁して收拾のつかない土石の怒濤のさなか、どこにもつかまるものがない、無空の暴流でしかない現実について、芸術が唯一、棹を差すことのできるものだわ。そうよ。

海は日没の明暗が濃く、その濃さは深淵のような静けさをなし、夜の深さを暗示する。その瞑想的な美しさは古代ギリシアのエーゲ海のようにであった。

ゆらゆらと夕の炎が雲間と海に沈み、天穹にいた月が皓しろさを次第に玲あきらかにし始める。妻が新留健にるけんに声を掛けた、

「あなた、そろそろおうちに入ったらいかが。冷えますよ」

「わかってる。もうすぐ終わるんだ。明日、鈴家さんが来てしまうからな」

早朝、鈴家貞次れいやさだつぐが発泡スチロールの容器に入れて魚を持って来た。

「おはようございます。お元気ですか」

「あゝ、お蔭様でな。いつもすまないね」

「いいや、こちらこそ助かります。こっちは魚は毎日、売るほどあります」

から」

快活に笑う。

「それはこっちも同じさ。野菜は余ってるんだ。夫婦二人じゃ大して食べられないしね」

「おや、本を読んでたんですか。やっぱり東京の会社で管理職やった方は違いますね。こっちとらあ、学生るとき、宿題で読んで以来、からつきしです」

「そうでもないよ。久しぶりだよ。老眼になってしまっただけからは読まなくなってしまったんだ。少なくとも長い時間はだめだね。」

実はこの詩人、結構良いと思うんだが、割と近くに住んでいるらしいん

だよ」

「へえ、全然知りませんでした。どんな感じの人ですか」

「ここに著者近影がある」

「はあ、こりや、山賊みたいですね！ いや、海賊かな」

或る日、テラスで誰かが言った。

「オルフ・リウ（龍）はこの近くに住んでいるんだ。来訪しないか」

アデルが頷く。「そう、私も聞いたことがある、近くに居るって話は。とても興味深いわ」

「いいね。行こうよ」

多くの芸術家たちが賛同した。既にシャンパーニュとワインですっかり酔っぱらっている者もいた。『旅の仲間たち』だ！　往年のツールキンの偉大な作品の名を挙げてはしゃぐ者もいる。ピクニックのように歌いながら歩んだ。草が生え、細くて岩でごつごつした足場の悪い道、断崖で灌木が行く手を阻む危ない道を一行は楽しく会話したり小さな悲鳴を洩らしたり思いがけない景色に歓声を上げたりしながら進む。樹や岩の蔭から見えたり、急に視界が開けて眼の前に広がっていたりする海は常に燃えるように碧く、細波に燦めいて美しかった。

グスタフの「城砦」からはまったく見えなかったが、オルフの草庵は歩

きで行ける距離にある。グスタフがこの地を選んだ最大の理由の一つに、オルフ詩仙が隣に住んでいるからというのがあったらしい。

かくしてオリーブ色の灌木と白い岩の隘路によるラビュリントスを1時間ほどくねくねと往って、ブリキの煙突のある簡素な丸太小屋の前に着いた。切株の椅子に白樺のパイプを燻らして、白髯を太鼓腹に垂らす巨漢の老人が坐っていた。体軀は北欧人で風貌はヴォータン（北欧神話の最高神。オーデインともいう）のようだったが、たつぷり蓄えられた鬚髯はまるで美髯公関羽（関雲長）のようにも見えた。

「突然やって来てすみません」

エイトが詫びた。

老人は怒るでも疎ましがるでも訝しがるでも微笑むでもなく、淡々と一行を迎え入れた。野外に置かれた丸太のテーブルに素焼の碗を置き、ハーブ・ティーを淹れてくれた。皆ゆっくりそれを啜る。神妙な気持ちになつてきた。茶会の席のようだった。

中エンは彼の詩を想い出した。

『 灌木の白き岩に 俄かに啼く野猴の声を聞き 銀霜の月光を仰ぐ
筆は自ずと 天衣無縫に 翻る黒き神龍のように

星燦の鏤められたる 漆黒の紙箋の上に

神仙の言葉を象る 詩文は咒のように

空蟬をなし 現し世を窠変ようへんさしむる

だがロゴスが世を変えるのか

或いはフシス *phos* が自らロゴスを装い

自ら望んで豹変するのか

フシス *phos* の睿智は余りに深し

人の智慧など雑草の繁茂のごとし

ただ水と光合成が起こす現象に若かず

嗚呼 所詮 人が何を知ろうか 知るとても

それがいったい何であろうか

英雄は言った

「我に生は死のごとし。我は死を超える」

無知無自覚なる者よ

死を超えた者は 死を超えたとは想わぬであろう

“同じ”などと想う者が 死と生を同じと感じるはずがない

すべての想いは生存への意志をその起源に持つから

フュシス *Physis* はかく絡繰りしたまいし

』

アデルはじつとすることなく、無造作に擱かれた陶器や水墨や硯を眺めては手に取り、時折瞑想するように眼を閉じた。物語の世界の住居みたいで、まるでケンタウルスカ、森のトロールがいそうな空気があった。中国の仙人が暮らす山深い峡谷のようでもあった。ヴァルハラ宮殿（又はヴァルホル *Valhöll* 戦死者の館）の食事会が想像できた。ウォルトは茶の冷

めるも知らず様々な質問を浴びせ、エイトはむつつりと考え込んでいた。彼の頭を諸々の思想・哲学、数々のコンセプトが廻っているのは明らかだった。

芸術家たちはそれぞれに啓示を得たようであった。

「疲れているわね」

「あゝ、最近、寝ていないから。うん。全然寝てないわけじゃないけど。あまり寝てないかな」

「同じよ。でも、もう少しで終わるんでしょ？ かなり進んでるの？」

「もう、でき上がっているよ、ほとんどね。だけど、何かインパクトがないんだ。もっと異教的な、サイケな、いや、スピリチュアル精神的な、と言うか、ね。古代ギリシア的な、しかし従来はその対極とも想われていたものも、そう、アッシュュールのな、アッカド的な、シュメール的な何かさ」

「その3つって、それぞれ結構、違うと思うけど」

「そういうもんさ。世の中のすべては異なり、でも大概似ていて、複雑に絡んで繁文縟礼、燦爛として眼を眩ませて捉え難い。氾濫し、過剰なまでに波瀾万丈なる放逸の豊穡、狂気だ、オルギア (orgia 狂操秘祭)、懶惰、絢爛、豪華、逸楽、しかし静謐。つかめば消えてしまふ。淡さ、危うさ。実在は刹那だ……色彩や旋律や形態の描線に解答はないのさ」

彼はいくつもある神殿やバシリカ（公会堂）を彩色するアートを試みている者のうちの一人だった。カーリー・ヘアで、鬚を蓄え、若い頃のピカソの画いた“El Loco”に似ていた。

「休憩しまーす」

梨沙亜はそう言つてその場を去った。いつも行くテラスに向かうと牛エングが前を歩くのが見えた。顔見知りだが話しかけたことはない。

別に興味もない。牛エングが足を止めた。眉を顰める。なぜ急に？ 彼女の視線を追うと、その先に白い髪青年がいた。妖しげなオーラが漂うイタロが独りで、海を見渡しやすい、断崖のふちの欄干に近い席に坐つていたのだ。それに牛エングが気が附いて、どうしようかと逡巡しているようで

あつた。なぜなら彼女もいつもアデルらとともに欄干に近い席に坐っているからだ。

イタロは氣にも留めていない、と言うより牛エンの存在にまだ氣が附いていないようだった。彼はただ海を見ていた。黄金のシャンパーニュのグラスを手に。泡沫が午後の遅い時間の傾き始めた日に照らされ、熾えるように耀いていた。きらきら躍り舞いながら上がり、明快で、それでいて幻想的で、細かな光のモザイクのようでもあつた。

牛エンが坐る席を迷っているようであることにイタロもようやく氣が附く。

「やあ。今日は珍しい、誰もいませんね」

「それでもお昼は何人かいたんですけど。……そろそろ間近だから、皆さん頑張っているんだと思います」

「確かに時間は半端だ。ふ。」

ま、私はそれを狙ってこの時刻に来たのだがな」

「そうですか、では、失礼します」

「ふむ」

彼はここの敷地の地図を広げていた。鉛筆で書き込みがしてあった。数十本の線が引かれている。小さな紙に何枚かの絵コンテ。皮革製本の小さな冊子は象徴学の書籍だった。マラルメの詩集もあつた。この人の頭の中ではないま何が煉られ、何が醸造され、どれほど複雑で緻密で精緻精密な、

遙か解き難い、高遠で甚深なプランが構築されているのだろうか、牛エンはそう思った。そう思いながら無意識に振り向く。梨沙亜と眼があつた。彼女はすぐに眼を逸らし、イタロから遠い、カウンターに近い席に坐つた。牛エンはそちらへも行き難くなつてしまった。どうしようかと思つたが、余り考えているのも避けているみたいだし、不自然だし、もう何も考えず、アデールらとよく坐る場所、欄干に沿つてならばテーブルの一つに坐ることに決した。

あゝ、こんなことで些末なことでまるで一大決心みたいな、私つてなんて些末なことに拘泥しているのかしら、本当に嫌になる。さなぎが殻を破るように自分を脱ぎ捨ててしまいたい。一層のこと自分の頭を踏んで抜け

出た次の世界に行きたい。ふと茜色入りの黄金色を帯び始めた陽光に照らされるさざ波が目に入った。海を眺めながら食事をするためにここに来たことを思い出し、水平線を見る。汐の匂いが鼻腔に甦った。

少し気持ち楽になり、足下の遙か下にある、岩寄せる波のしぶきをく
るぶしに感じる。

駅を降りた葦原^{あしはら}芦男^{よしお}は困り果てていた。手書きの地図を作って持って来たはずなのだが、どこかへ落したらしい。個人邸だし、まだ新しいので、スマートフォンにあるアプリケーションの地図で見ても出てこない。タク

シー乗り場はあったが、タクシーがない。少し歩くとコンビニとレンタカー店がある。そこで訊くしかないか。すぐわかる場所だよと言われていたので地図を余り気に懸けていなかったし、機械が正常に動くのを見届け、万が一のトラブルがあった場合、対応（した振りを）して会社の誠意を示すため、一応行くだけなので、気が抜けていたし、彼の性格がこういう感じなのであった。そもそも機械に問題が起こった場合、彼がいても何もできない。何の意味もない。

若い女性が歩いていた。

「すみません、この町に異鬼^{いおに}面^あつてところがあるって聞いたんですが、どうやって往けばよいかご存知ですか」

女性は最初、眼を丸くしたが、すぐに不機嫌そうな顔になった。

「私も旅行者なんでわかりません」

葦原は苛立っていたので（とは言え、自分が原因で、自分のみが悪いのは頭ではわかっていたが）、カチンとくる。

「僕は旅行者じゃありませんけどね。そうですか。失礼しました」

「じゃ、地元の人ですか？ 地元の人なのに知らないんですか？ お仕事で来たって、旅は旅ですよ」

彼女も苛立っているらしい。葦原にも何となくわかった。女性は大^{おお}廻^{まわ}沙^さ奈^な夏^かだった。彼氏とは別れてしまっていた。肩を^{すく}竦めてコンビニに向かうとしたとき、タクシーが通りかかる。

「取り敢えず近くの金物屋に行ってくださいませんか、ホームセンターでもいいです」

革靴じゃ危ないと言われていたのだ。領収証を会社へ提出すれば経費で落ちるはずだった。

到着して店内に入ろうとした途端、若い女性とすれ違ったが、声をかける気も、必要もなかった。ゴトンという音がした。彼女が荷物を落としたのだ。だが憑かれているかの様相で気が附いていないようだった。

「落としましたよ」と言うと、尋常じゃない表情で彼女は驚愕し、慌てて平静を装い、こう言った。

「すみません。急いでいたので。ありがとうございます」

「どういたしまして」

後姿を見送りながら彼は少し不思議に思った。

「斧アックスかな？」

しかし女性の赤毛のカーリー・ヘアと、太く強い眉、狂おしく熾えていた瞭かな燦めきの濃い双眸が印象に烙印され、そのインパクトで疑念は薄らぎ、すぐ霧消する。

「オルフのところに行ったとき、不思議と君のことをずっと考えていた」
エイトは屈託なくそう言った。屈託なく、とは、意識することなく、と

いう意味だ。何とも想っていない、そう感じつつも牛エンは彼の真意を探るかのうちに、彼の双眸をじっと見た。ようやく尋ねる。

「どうして」

その問いに対し、彼は関心なさそうに肩を竦め、

「さあ。君の『ユン』という姓は龍の意味だろう。オルフの『リウ』も龍の意味なんだ。それでかな」

いたずらっぽく笑い、

「ほうら、あそこでウォルトが見ている。彼は君に恋しているのさ。君のようなか弱いタイプの女性は男たちの攻撃的本能を刺激するんだよ。君は自分が思っている以上に男性から興味を持たれやすい」

その様子を眺めていたウォルトは嘆息していた。彼は自分の恋と恋の性質を知っていた。彼の耳に聴こえてはいなかったが、まさしくエイトの言うとおりであった。

彼は自分でもそれを自覚していた。すなわち攻撃性を刺激されているのであり、純粹な恋愛ではないとも言える、と。

しかしそのような明察が何の足しにもならないこともはつきりと感じていたし、作家の眼はそれを冷徹に観察し、暴き、いかに表現すべきか探っていた。

意識の二重構造、又は三重、四重構造、いや、無限に重層する。虚しい。

その場を去り、彼は彼のなすべき仕事に戻る。地上を超える高い芸術性

にしか逝くべき道がないように思えた。人間的感情を超越し、芸術の歓喜の天上に達する言葉を紡ぐべく、思料し、苦悩し、彫琢鏤刻し、魄を焦がし、魂を削る。

「苦悩から芸術は生まれる。ゴーギャンは苦悩した。ベートーベンも苦悩した。ポーは苦悩した。レンブラントは苦悩した。トルストイは苦悩した。

あゝ、苦悩を恥じて迷うべきではない」

苦悩？　しかしこれは苦悩なのか。苦悩という悲劇的な名称に酔い痴れて、自らの鬱屈を世に知られたその名で呼んで悲壮感を呼び覚まし、ヒロイックな感情で慰めているだけだ。人はどうかして肯定の地を探したいらしい。落ち着くべきところを探しているだけだ。収まりたいと希っている。

るだけだ。誰しも地面に足を着けずには堪えられないのだ。

人間的な、余りに人間的な。人は自分の個人的な体験を、自らを救うために、大宇宙の公理公式に格上げしているに過ぎない。芸術は。すべての芸術は。人の営みである以上、芸術も例外ではないのだ。

火曜日、小雨の降る日、仕事を休んで中央総合病院へ行った天珍奎隆^{てつけいたか}は、午前9時、MRI（核磁気共鳴画像法 magnetic resonance imaging）を撮り、整形外科でもはや椎間板ヘルニアの心配はないと言われ、ただ油断すれば復た再発するからと添えられた言葉はさほど気にもせず、上機嫌で

リッター・カーのハンドルを握り、朝飯を余り食べていなかったの、まだ10時半だが、食べようと思い、量販店に入ったものの、何と改装中で食べもの屋は全滅、近くに千円カットの床屋があることを思い出し、そつちを先に片附けるかと考え直し、10分間の理髪を終え、ぶらりと近くのもう一つのスーパーに入ると、かつてケーキ屋だった場所がフライドチキン屋になっていて、久しぶりに喰らおうかと欲し、最近油ものを控えていたからたまにはなどと想いつつ、食しながら坐っていると、若いお母さんと一緒に小さな女の子が傘を差している、しぐさがどこか大人っぽくて可笑しくて可愛かった。

家に帰ると、いつもの日課となっている新人賞応募のための原稿書きを

始める。倫理的かつ道義的に言って、いったい、いくつまで新人賞は応募できるのだろうか、などと想いつつ、薄笑いする。

いずれにせよ、仕事終わりでくたくたの深夜の原稿書きはなかなか捗らないが、こういう日は佳い。病院へ行くのを理由に一日休みにして良かった。でも上司のスケジュールの関係で危うく休みがなくなりそうにもなったが、ともかく紆余曲折の末、休めてよかったと独りごつ。

日が暮れ、闇が次第に濃さを増し、しとしと雨が枝の葉を叩くと妄想が濛々と膨らみ、あやしうこそものぐるほしけれ。

舞台は古代の架空の帝国である。深い黄昏だ。戦いの前の夕方である。豊旗雲に入り陽が鮮やかに濃く差すとき、今宵の月夜は清明だろうなと言

うのは、勇む気持ちと明日の幸運成功を祈る気持ちも混ざっているに違いない。或いは湾に集う数多の軍船と、豊旗雲とを重ね合わせているのかもしれない。

商業都市であつた帝国の都は海洋貿易で莫大な利益を上げていたが、隣国と制海権を争っていた。

外交は温和な文書の交換が為されていたが、事務官の会議があるばかりで、大臣や大貴族、枢機卿や皇族、ましてや皇帝の会談などの予定はまったくなかった。一触即発の緊迫した空気の中、遂に戦いの火蓋が切られ、海戦は始まった。

神の御名の下に（宗教が異なっているため、異教徒征伐が大義名分であ

ったのだ）、いずれが真実であるかを決すべく、真理を廻る闘いを闘う。だが主人公デビル・アスタロテは由緒正しい貴族であり、法皇の血族でありながら、反王政的なニヒリストで、戦争をまるで祭典のように楽しみ、命を賭して闘う戦士を芸術家に喩え、嘯く。彼は臣下のイタロ・ヴラド伯爵と枢機卿イヴイルを呼び、こう言った。

「真理を廻る闘いは所詮、自己の承認を廻る闘いに過ぎない。真実とは偽装だ。そのような概念は存在し得ない。芸術からは闘う。この暴激なる流れに棹を差し、藁をもつかむ気持ちらしい。浅ましい、愚かな、薄汚い人間ども。ふふ。美だ。惨死犬死、おまえら犠牲獣が芸術だ。承認を廻る虚妄な闘いは芸術のための シンボシオン 宴に過ぎない。

祭典だ」

『ミューズの歌によりて壮大なる饗宴は始まらん。神に見初められし名もなき才能たちよ。美しき酒が振舞われ、鐘が鳴り、高らかな喇叭、四方の門が啓かるるなり。黒き熾天使、咽喉を塞ぐ死の狭霧、終末の世紀、大いなる炎の時が始まりぬ。太陽のよう立ち昇る炎よ、自然法爾なる三千億兆宇宙の主宰者、毘盧遮那仏よ、最高存在よ、究極最真よ、我らは一つなり、我らは一つの宇宙をなす。汝の叡智は流出し、我らの魂に宿る真奥の意義は汝に由来せり。苦悩はない。

されば迷う莫れ。

巧みなる者らよ、精神の韜晦者よ、蒼きイシユタル門をくぐり、自らを啓き示せ。世界は自らの存在すべき意義を甦らするなり。選ばれたる聖なる芸術家たちよ、華やかに咲き濫れよ、妄りに淫らに、繚亂せよ』

作業服を着た男たちが数十、いや百数十人敷地に入り、あちこちに散つて作業を開始していた。鉄鎚や電動ドリルの音。アデールのサウンドを非難する資格があるうか。そう、彼らはエフィに雇われた者たちだ。奇妙な衣裳のアシスタントたちが布や絵具や装飾用の大道具や彫像を運ぶ。たく

さんの図面があちこちで拡げられていた。日に日に増える様々な照明や機器、機材。

まるで世界最大のロック・バンドのツアーがやって来たかのようなだった。チュニツクを着た妖精がストローでシャボン玉を膨らませ飛ばす。要塞を守る自動装填機械銃のように丘に機器が配備される。大きな発電機がコンクリートの地下室に置かれた。

幼稚園バスが走る。町の小学生らが学年の小さい児童から順に学校から家へ帰り始める。中学校の校庭では部活の声が響いている。網を修理している漁師の奥さん、鍬を肩に乗せて畑から降りて来たお爺さん、郵便配達人がバイクで通り過ぎる。町役場のバンが現場に向かう。リフォーム会社

の社名が入った自動車がコンビニエンス・ストアのパーキングに入る。踏切の警鐘が鳴る。交差点の信号機が赤になる。八百屋の前で無駄話する奥さん方。小さな車輪の附いたバッグに着いたハンドルにつかまって歩くお婆さん。

そしていよいよ祭典の日が明日だという日、ちよつとした事件が起きる。エイトの買った茶碗が缺けていた。誰かが意図的に缺いたのだ。

「別に大したことじゃない。と言うか、そもそもがこういう物なのさ。日常においてもいくらでも割れるだろう。同じさ。『異なしむる事なかれ』さ」

エイトはそう言つて嗤つた。

サントリーニ島のような夕日が落ちる。茜オレンジと漆黒だけの世界になる。まるでイモリだ。陰の部分は奈落まで堕ちる巨大な深淵のようであった。恐るべき穴のようであった。光も抜け出せない途方もないブラックホール。さざ波が細かく光りにちらちら瞬き揺れる。白い建物は濃い桃色へと染まった。

白崎は汗を拭いながら現われる。

「和歌山さん、できました。終わりです。仕上がりしましたよ。予想外に難儀でしたね。あれ、何聴いてんですか」

「聴いてんじゃない、観てるんだ。ユーチューブだよ」

「動画ですか」

「ああ、Sex Pistolsだ。パンクだ。”Anarchy in the UK”だ」

「意外っすね、和歌山さん、パンクなんて」

「俺だって1977年は14歳だ、中二だったんだ。中二病さ。あの頃、世界はパンク一色だった。ふ。いまはそういうのないな。」

プレスリーやビートルズ、サイケデリック、ヒッピー文化、そういうの
ないよな。そういやあ、イーグルスの『ホテル・カリフォルニア』にこう
いう歌詞があったよ、“当ホテルでは1969年以来、スピリッツを置いて
おりません”ってな。そういうことさ。シド・ヴィシャスは1979年に死
んじまったしな。まだ21歳だった。そういう時代だった」

和歌山の悲しそうな顔を見て白崎は肩を竦めた。よくあるジジイの戯言

だ。昔は何でも良い。好いものは善い。

夜明けの空を見ながら鈴家貞次は波を裂き割りながら乗り越える舳先に立つ。漁は上々だった。港に着いてから魚や伊勢海老を下ろし、煙草を吸う。獲れた魚の一部で鍋を作り、仲間とともに熱燗を呑み、昼になる。一眠りして網を整え、繕い、海を見て思った。

「今宵は霧になるな」

最近の天候は予想が付きにくい。時折人はそのようにぼやく。しかし天候とは常にいくらか「異常気象」なのものである。

貞次はそんな風に小難しく考えるわけではないが、「最近の天候は」などとはけして言わない。常に自然を相手にしていると、謙虚な気持ちになる。フュシスは常に気まぐれで豊かで、残酷非情で快活で壮大、かつ無味乾燥で、驚嘆すべきで、美しくも怖ろしく、底知れなく甚深神妙である。

メイン・ディツシュ。第四章。

『人は尋ね希い求める。』

天の路を。天の命を。真実なる天の啓き示す言葉、摂理、ロゴスを。世間を席卷し、世界を制覇し、宇宙に王威を振るうのは、ただ物理の力

のみ。強き者が弱き者を挫くのみ。正義にしあらんとて力なくば徒に蹂躪され、儚く略奪され、酷く殺戮され、惨めに虐げられ、ただ虚しく滅す。

人は天道を欣求す。

それ故に魂はあり。芸術はあり。倫理はあり。正義はあり。眞実は存す。

見よ、ここには彼は世俗を超越し、雲を翔り越え、天を凌駕し、一切を捨置除却して地上に天を在らしめん。むしろこの日のため、人類を生ぜしめられし。この日のため、存在は非存在に非ざり。この日のため、大宇宙は開闢の義を有したり。

天よ、大いなる者よ、ナマス 帰命 サルヴァジュニヤヤ 一切叡智。

あゝ、そして我ら人間よ、耳ある者は聴くがよい』

霧に包まれ、高台は見えなかった。しかし遙か洋上は晴れ渡り、燃え滾る夕陽が昏いほど濃いオレンジに水平線を染めていた。異様な風景だった。

オープニング・アクトはアデルのステージだ。エイトはイシユタル門の傍らに缺けた碗を置いた。そして背を向けて東の低い丘の神域に入り、杜の中で立ったまま瞑目する。瞑想する者であるかのように。深き森の哲学者のように。そこにユーリエがいた。「日本人の血が私にもあるのよ。もう一つの血もある。すごく不思議な感じだわ」 起源の地の血と旅の果ての地の血とが合致した彼女をエイトは美しいと思った。もっとも異逆的

なものが混ざり合う。前衛の窮極のような。エキゾチズム、異端。恐らくは、これが彼女の存在意義なのだ。だから凡庸こそがいまは欲しい、エイトはそう想った。ウォルトが録す、『開幕は開会の言葉もなく、ふわりと空気のように始める』と。

アデルが最初に、独りで円形劇場のステージの上に立った。その姿は立ち昇る焰のようであった。手には古代希臘の豎琴を持っていた。奏で詩を歌う。

「怒りを詠え、女神よ……………」

数十秒だ。その間に、ロス・ボヘミオスの奏者たちがステージに上がる。

人間はいつもと同じだが、バイオリニストが手にしているのはエレキ・ギ

ターだった。パーカッショニストはドラム・セットに坐った。ギタリストはベース・ギターを弾く。始まったのはブルースだった。アデルのシャウトを初めて牛エンは聴いた。誰もが意表を突かれた。彼女がフラメンコを練習して歌うのしか聴いたことがないからだ。あれはフェイクだったのか。烈しい Blues は、まるでジャニス・ジョプリン Janis Lyn Joplin の歌のようだった。聴衆は初めに戸惑い、やがて熱狂、そして拍手喝采した。彼女がステージを降りた後は舞踏芸術家によるバレエがさっさと始まる。アデルはステージを顧みもしない。ステージの裏で次の順番の肉体派前衛画家がパフォーマンスの準備をしている。

牛エンは啞然としていた。まるで裏切られたような喪失感、異様にくっ

きりとした太陽の残滓。

やがて陽は沈み、あちこちでライトが照らし始める。霧が靄色にじに染まる。オープンングが終わって、芸術家たちの多くは移動を始めた。円形劇場を眺め見下ろすような舗道を廻り往きて、聳えて壮麗な、繁縷はんるにして懶惰な、古代の薫香が馨る蒼きイシユタル門を次々にくぐった。

照らし上げられる壮大なる門。

グスタフは誇らしげに見上げ、しばし見惚れた。自らの偉業に満足した者の表情だった。ふつと足下に転がる缺けた茶碗を眼にし、不快そうに顔を歪める。いったい清掃係は何をしているんだ。そう思つて周囲を見廻したが、担当が見つからないので、「まあ、よいか、このような些細なこと。

そう、これもまた自然なことだ」 さように納得してむしろおのれの達観に少なからず感動を覚えつつ門をくぐる。皮肉な微笑のイタロが直後を追従する。

門から入ると丘を登る路にはグスタフ自慢のコリント式オーダー
(Order 円柱と梁とによる様式・構成方法) の画廊ギャラリーがいくつもあり、芸術家たちは意匠を凝らして絵画や彫刻やオブジェの展示を行う。又ギャラリーばかりではなく、小さな舞台などもあり、様々なパフォーマンスが行われた。グスタフに随行するウォルトはタブレットPCを片手に周囲をきよろきよろと見廻す。「まるで花の雨が舞うようだ」 そう思いながらこれらの光景に見惚れていると、あたかもビートルズの『サージエント・ペパ

ーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』を聴いたときのような鮮彩な感覚に襲われる。古代の壮麗もあり、神厳な芸術と魂の祭典だ。

古代ギリシア風の建物はすべて彩色されていた。古代ギリシア建築も当時は彩られていたという。今回のこの彩色はフランス人の（無名の）コンセプチュアル・アーティストたちが手掛けていた。これもアートだ。

長い髪を肩に垂らし、鬚を伸ばし、中世吟遊詩人になり切った青年が『オシアン』を詠う。儂くも戦士は歴史に強い輝きを残す。

高みに近附くとエフィの画廊が現われる。大きくて、ファサードに薔薇窓を持ち、行く手を塞ぐように建っていた。路はその中が続いている。すなわち高みに行くには必ずここを通らなければならないのだ。

「さあ、これがメイン・ディッシェだ」

グスタフがそう呟いた。

画廊の様相はすっかり変えられていた。彩色は東洋的だった。ギリシアというよりもアッシュールのような感じた。実際、浮き彫りもあり、獅子狩りの様子もあつた。生きた獅子や豹が吼える。ナツメヤシ、アラベスクの絨毯、龍の図。

そのような中に普通にいくつかの抽象画も掛けられていた。彩色され衣装を着せられた彫刻もある。中央に祭壇があり、彫刻や油絵によつて皇帝ネロの宴が再現されていた。芸術の氾濫、繚乱、豪華による狂操^{オルギア}乱舞。歌い手が現われ、炎に包まれた古代帝国の首都ローマを題材にした歌劇の一

節を吟ずる。踊り手がサロメの舞いを舞う。精巧な生首が人々を睥睨する。

「ふむ」

グスタフの表情は満悦には程遠いものへと変わった。銀の盆を手にした給仕が現われて言う、

「シャンパーニュをどうぞ」

そう言う男をじろつと見る。この男の存在もまたアートの一部に相違ない、冷厳なる科学的観察者のアイロニーか、……グスタフはさように妄つおもた。

そう想いながら観ると、意味があるかのように、ステムの長い、細身のグラスの中で黄金の液体が激しく泡を立ち昇らせている。「視覚と味覚の

交感をお楽しみください」 交感：…ボードレールか：…陳腐な…

不満を抱きながらもグスタフは彼をじっくり眺めた。ストランド誌の挿絵にあるシャーロック・ホームズに似ている。確かに背丈が6フィート以上はあるに違いない。だから何だ？ 彼に続いて次々と芸術家たちが入って来た。ギャラリーは人でいっぱいになる。

「ほう、これは」

周囲から賛嘆の声が上がった。

渋い顔でグスタフはうなずく。確かに絵は悪くない。しかしこんなものではなかった、彼が求めていたものは。こんなにもありふれた、新聞紙上の文化面を飾るようなものではない。

エフィは双眸を大きく睜^{みひら}き、一同をじつと見た。

「すべての存在は真実です。Αληθεια（アレーティア）です。どのようなものもありのままだから。そうよね？」

あなたの落胆と失望と幻滅は肉のうま味を引き締める黒胡椒でしかないわ」

次の間へ行くとそこは暗かった。塀壁のように横に長い滝が流れていて、涼しい風が額を撫で、冷たいしぶきが頬にあたる。神威が漾う。よく見ると白虎がカッと眼を怒らせ、牙を剥く。「うわっ」グスタフもたじろぐ。

むろん現実ではないのはわかるがそれは生きて睨み、不思議な速度の動きで動いているのだ。

灯が点く。途端に日常に還った。瀧も虎も絵であつた。あまりの描写力に錯覚していたのだ。動いて見えたものは動いておらず、ただの絵で、瀧も落ちず、風もしぶきも錯覚だつた。

「こんな、いや、信じられない」

グスタフの背後で誰かが呟く。その呟きを聞いてイタロがくすつと笑う。ギャラリーを出る。当然、路は続いていた。

霧に包まれていたため、下にいるときにはわからなかったが、上方の神殿群はすっかり様相を変えている。真紅と赤と唐紅と朱に緋と赭に塗られた建物はむしろ首里城のように見えた。金泥を塗られた部分は霧のせいで深く濃く生々しく輝く。霧も五色の雲のように観ぜられる。阿弥陀如来の

来迎^{らいごう}の雲のように。

霞むケルト十字架が見えた。十字架が歌う。「神は愛、愛はすべてを救う。愛がすべてを創りたまう」イタロが不敵な笑みを浮かべた。まるで美味そうな仔羊を眼の前にした獰猛で残虐な餓狼のように。

風が吹いて霧を引き裂く。舞台の仕掛けのようだった。黄昏に残る蒼穹が青い瞳を覗かせる。

不思議な人物が数人立っていた。よく見ると複数のホログラムを重ねた深いホログラムで、普通と違うのは表面がシャボン玉のように虹色の透明な模様を移ろいのように廻らせていることだった。

突如、高らかな喇叭の響きが東西南北から空気を劈^{つんざ}く。

チベットの読経のような、サウジアラビアの聖なるアザーンのような、サンスクリットの読誦のような、咒を誦する声が聴こえ、先ほどまでの蒼穹をかき消すようにどこからともなく生じた雲が集まり始める。霹靂が轟く。ピアノが始まった。雨が降り始めた。オペラ歌手が歌い出す。神々の像があらわれる。これもホログラフであつた。CGによつて作られ、3次元的に空間を占拠し、動くその立体の動画は透けることなく、実在そのものであつた。実際、生きた人間もごく少数混ざっていたが、存在の迫真感においてはまったく区別がつかない。ただ現実にはあり得ない風貌や衣装の動きや色彩や光輝の仕方や雰囲気などから分別ができた。霧のような雨になつた。

人は物に固有の色彩が附着していると考える。しかし色は乱反射した光の波長を人間が脳内で解釈して構築したものだ。物に色彩はない。ただある波長の光を吸収し、或る波長の光を反射するため、反射する波長の光がそのものの色であるかのように認識上に構築されているだけだ。

この圧倒的な実在感は、咒の言葉の響きが与える暗示や、匂い・音・風などの総合が与える効果、光を放つ特殊な重層ホログラムの精緻な視覚に拠るものである。それは現象以外の何物でもない。インパルスを誘導し、神経伝達物質の分泌を促し、活き活きありありと脳内に実在を組み上げる。現実にして遜色はない。時を遡るような路の周りに、世界が、歴史において、存在し始める。雨が止んだ。

眼の前はロシアであった。2月だった。サンクトペテルブルクのロシア革命の立体映像が流れ、たちまち囲まれる。が、それはすぐに消え去る。空間が動く。空間は極小の粒子であった。粒子が紡がれて人物が現象する。その人物は老いたレフ・トルストイとなった。鬚を蓄えた文豪はたちまち若き軍人に変じて、やがて思慮深く鬱とした少年となった。革装丁の『Война и миръ』の頁が風にめくられる。無限の宇宙空間が現われ、拡がり、収斂し、すべてが終わり、そこはただの寂しい四阿（あずまや）とテーブルとになった。堪えようのない空莫であった。場所が喪われたかのような喪失感がある。時間性が場（空間）を為していたのだ。空間とは何か。それは存在が醸す。“ここに自分がいる”感だ。だからそれがないと

堪えがたい喪失感がある。

少し階段を上ると、フランス革命だった。撃たれた顎を覆ったまま、断頭台の露と消えるロベスピエール。自由と理性、キュロット（貴族の穿いた半ズボン）を穿かない人々、基督教会への礼拝に革って行われた『理性の祭典』や『最高存在の祭典』、死の天使長 Louis Antoine Léon de Saint-Just.

フィレンツェ、メディチ家の事務所であったウフィツィ（現ウフィツィ美術館）にあるドーリア式廻廊、暗いアトリエで光の線が差す中、レオナルド・ダ・ヴィンチが顎に指を当てて首を傾げ、天を示す若きヨハネを画いた絵の前に立つ。焦げ茶色の木製のパステルで混ざり、歪む絵具。黄色

や赤や、白や黒。烈しい抽象画のように。ヨハネの静謐な微笑。

劉邦は沛県豊邑中陽里の農民の子で俠客であつたが、初めて中国全土を統一した秦帝国を斃し、幾度も敗れながらも無敵の英雄であつた西楚霸王の項羽を打ち破り、漢帝国の初代皇帝となり、漢の高祖と呼ばれた。革命とは天の命令が革まる（天下を治めるべき朝廷が新生する）ことを言うが、高祖の即位は真に革命の始まりであつた。高祖の廟が峻険たる狭まつた断崖の栈道（山間の断崖絶壁を行くために木材などを打ち込み、棚状にして造つた道）となり、やがて漢中の凄まじき風景になり、やがて項羽と劉邦の面する鴻門の会に変わり、中陽里の安酒場で大酒を飲む鼻の高い、龍顔の大男の姿になる。その後背は焰の光で輝き、赤龍が立ち昇つて天に亢い、あらが

蒼穹を黄金の炎に変ぜしむ。

「龍のごとく肯んぜよ、これ究極くぎよくの真也なり。無双の敵をも斃し、万難を無みする」

沙羅の双つ樹の下にて痢病による死、「喉が渴いた、水が飲みたい」、ナ
イランジャーナ―河（尼連禪河）の岸边で村娘スジャータの作る乳糜（乳で
作った御粥）を食べて体力を回復させると、ガヤー村の菩提樹の下で静か
に座禅を組み、瞑想に入つて解脱する釈迦。髪豊かな蒼き憂鬱の青年。
葡萄酒色なす地中海に朗々とホメロスが謳う大いなるイーリアス。どの
ような映画より壮大、ヴィヴィッド、迫真し、ダイナミックで、切なく、
小説よりもリアルで真実。ペリクレスが偉大なるギリシアを建築し、彼の

愛人は神のごとく耀く美しきアスパシア、アテナの降臨かと見紛うばかり、パルテノン神殿に祀られた巨大なアテナ神像は象牙と黄金とで美しき曲流線を描き、襜の織りなす旋律を醸す。微妙微細なる起伏、大理石に産み出す奇跡の柔らかさ、優しさ、複雑にて精緻な、生命の宿る形状。多くの彫刻が神々を模して造られたのは美の完成こそ神に他ならないゆえ。言説を絶す。ソクラテスは語るも、その言葉を残さず。終にプラトンはアイデアを唱えるも、声は潰えた。やがてスパルタに敗れて沈む黄昏、さような運命が待つのであっても、碧く炯めく双眸のギリシア市民は誇らかに「労働は魂を瑕疵する」と言つて憚らない。

ネフェルティティの信奉した唯一神アテン。放射状に光線を放つ円盤の

ような太陽のかたちをなし、生命の象徴である杖アंकを持つ太陽の神。アマルナ革命、イクナートンの宗教改革は儼く。そして必然的に Realistic なアマルナ様式の美術。地上で最初の一神教。唯一神。

厳しい氷河の時代に堪えたネアンデルタール人たち（約二〇万年前から二万数千年前）もイタリアやコーカサスで連続する噴火によって生じた氷河期に堪え切れず、やがてイベリア半島南端のジブラルタルで潰える。アルタミラの洞窟の赭と黒のたくましき野牛、躍動する、光りなきその闇で炎に照らされたクロマニヨン人たち（約四万年前から一万年前）の陰翳。副葬に花々を添える。ホモ・サピエンスはアフリカやアジアにも居住し、最後の数千人になるも辛く存続す……

それらの現象は数秒で滅びては再生し、繰り返した。サンサーラだ。

頂上の手前には一人の孕んだアフリカ黒人女性。旧石器時代の Primitive な感じが次第に変化し、金や青や赤の宝飾や象牙に荘厳されていく。染められた衣飾や細かな刺青、滑らかな深いブラウンの膚。ミトコンドリア・イヴだった。約十六万（プラス・マイナス四万）年前にアフリカに生存していたと推定される。

彼らが聴いていた歌が繰り返される。

懐かしい、懐かしい歌が：：魂を揺さぶる真の歌が：：

本篇の挿入歌。

『Σεργην̑よ、セイレーン、

翼持ち、歌いなし、

その美しき歌声で人を惹き、

死への路へ引き擦り込む者よ。

至らしめる者よ、死へ』

エフィは臉に涙をためるグスタフを促した。そんなものはかたちだけの感傷に過ぎないと言わんばかり。

「さあ、進みなさい。行きなさい。逝くべきです」

彼は狼狽したような顔をした。恍惚とした表情を遺しながらも畏敬の念で怯えている。

「こ、この上へ、行くのか」

「むろんです。存在の奥義へ、芸術の頂点へ。真の事実へ。さあ、どうぞ」

「私独りでか」

「あなたに見せたいのです」

「そ、そうか。ああ。……ああ、いいだろう」

「惶れているのですか。無理もないでしょうね。あなた自身の生まれ来た昏い洞穴に還るのですから。ある意味、死と同じです。しかしすべてはあ

なた自身です。あなたは歴史の累積による結果です。そして未来へ投げられた橋です。現在も過去も。あなたでないものはない。連綿たる有機体の継続です。わたしたちのすべても」

「いったい、何があるのか」

「言葉で何がわかりますか。あなた自身の眼で見なさい。ここから真の芸術。体験でしかわからない、死と同じように個人的な体験です。誰にも公開されない、真の芸術。誰もが知らないのに、知らぬ者のいない真の芸術です。ここから先はあなた独りで行くのです」

「わ、わかった」

グスタフは数段を上がった。僅か数段の高さだ。ちやうど追従してきた

数人が1メートルほど高い位置に立つ彼を馬蹄形（又は半円形）に囲むような感じになった。

満天の星の下、宇宙空間にただ独りだった。するとそのとき突如すべての光が消えた。すべての3D及び4D映像は消えた。ただ風が虚しく岩場をびゅうびゅうと吹く。深い藍色の天空と海洋。

「何？」

エフィが鋭く叫ぶ。

一人の女が岩陰から立ち上がる。凄まじく歪んだ唇から歯を剥き出し、眼が飛び出しそうなくらい睜みひらかれ、大きな白眼の真ん中に爛々たる黒眼が滾ろい揺らぎ、瞳あなの孔が拡がっていて、叫ぶ。

「あはは、これですべて台無しね。ざまあみろ、電源を破壊してやったのよ。一番大事そうな分電盤を見つけてやったわ。ニシキ蛇みたいに太い線をぶった切ってやったのよ。この斧で！ 斧でよ！ あは、やっと見つけたのよ。執念だわ！ 散々転んで、危なく海に堕ちそうにもなった！ でも神はあたしの味方をした！」

エリーだ。血だらけだった。憎悪憤怒怨嗟で、どす黒い顔色に口が裂けるぐらいに凄絶なる狂気の嗤い。髪を振り乱し、エフィを指さし、烈しく罵倒す。

「あははは、あたしの勝ち、あたしの勝ちよ、エフィ、あんたの負けよ、ざまあみやがれ！ 思い上がった女、天罰だわ、泥棒猫、淫売め、心の醜

い女、腐れ○□△×！ 死ね、死ね、死ね、死ね、死にくされやつ！」

エフィは欣然と笑った。

「素敵な人ね。執著は人間を破壊する。悲劇、非業、悲惨、ああ、真の人だわ。素晴らしいよ。まるで殺戮の鬼女神像のように美しくさえある。漆黒の魔神、血を滴らせる偉大なると修羅を屠る神、ああ、エリー、最高ね、最高のエクスタシー、最善の犠牲獣、あなたの言うとおり神は凄惨なあなたの味方よ」

「あは、あは、てえめえ、負け惜しみ言ってるじゃねえ、何言ってるかわかんねーよ、頭おかしいんじゃないの、糞女！」

「さあ、これからが魔法よ。ショーアップをありがとう」

大絶叫とともに堕ちて行く。

誰もが蒼褪めた。

「助けに行かなくては」

数人の男たちが走った。

毅然たるエフィは、

「さあ、続きを始めるわよ。進みなさい」

啞然とするグスタフの背を叩く。

「あ、ああ」

見れば、ミトコンドリア・イヴは姿を消えていた。段を上がると、数個の石が残されているのが見える。どうやらこの位置から観たときに初めて

像を結ぶように構成されているらしい。

「これは」

200万年前の礫器（ペブル・ツール pebble tool）だった。またいくつかは礫の一部に両面から打撃を加え、表面を剥離させてジグザグ状の刃をつけた石器（チョッピング・ツール chopping tool）であった。

礫はやがて白豹の牽く黄金の車輪を持つ天蓋のない二輪車になった。その豪華な座席には聖人が乗っている。太陽色に輝く髪、炎のようにゆらぎ渦巻く紫摩黄金に包まれていた。

全身は様々な装身具や法具に飾られている。すべてに意味があり、すべては精緻に細工され、喻えようもない美しさと清らかな神聖さとを兼ね備

えていた。孔雀石、青玉（サファイア）、蒼瑠璃（ラピスラズリ）、翡翠、紅玉（ルビー）、エメラルド、碧石、ダイヤモンドによって造られている。それらすべてに尊い聖なる咒が彫られ、また象嵌されていた。聖人は眼を瞑り、聖の聖なる祈りを捧げる。

唇からあふれる言葉は流れる一筋の水のように繋がりを泳ぎ、光の河となった。川は大河となり、まるで天の川のようにであった。光は驚くべき速さで眩さを増し、光の潮となった。燦々たる海であった。広大無辺なる海であった。海は金燦の雲気となって昇り、霹靂が轟き、虹色の稲妻を乱舞させた。雲は五色となって渦巻き、海も空も雲も巨大な渦になり、それは黄金の龍神となった。

龍は連なる神聖な文字になる。それは非常に有名な聖句の文字であつた。
ぐわふてゑゐる　ぐわふてゑゐる　ぷわらぐわふてゑゐる　ぷわらすわむぐ
わふてゑゐる　うおでゐる　すうわあふわあ

(羯諦 ぎやうてい 羯諦 ぎやうてい 波羅 はら 羯諦 ぎやうてい 波羅 はら 僧 そう 羯諦 ぎやうてい 菩提 ぼじ 薩婆訶 そわか)

文字は再び渦をなし、卍をなす。卍はさらに聖の聖なる聖の極みの徴を
象る。それがどのようなもので、どのような色彩で、どのようなかたちで
あるかを言い表す術がない。言葉で表現できない形状であつた。動いてい
るのでもぼやけているのでもないのに、はつきりした形状を持ちながら説
明できない形状。あたかも四次元の世界にある物質のように。正確な表現
ではないが、強いて言えば、形状が明確なのに他との境目がない。あたか

も空気に溶けているかのように。

「おお、あゝ」

グスタフは膝を突く。それは堪え難い感覚を肉体に産み出した。捉えられない、RealityよりもRealisticなRealityとも言うべきもの、呼吸がでないほど純粋な空気のような、凄まじい透明さとも言うべきもの。いや。ウォルトは眼の当たりにした事象が見えるがままにタブレットに指で素早くし録す。

『路傍の石だ。』

岩に生えた雑草だ。

茅葺屋根に生す苔^むだった。小さく急いて流れる清流に糸なす深緑の藻、

雨に濡れて雫する松毬^{まつぼっくり}、蟬の抜け殻、蹲踞^{つくばい}の水に泛ぶ黄色い朽ち葉、放擲されて苔緑なす茶碗の欠片。

その存在感が¹³⁸億年前に起こったビッグ・バンの原因となった。そう言うとは奇異に思うかもしれない。しかし宇宙開闢以前には時間も無も存在しないのである。結果が原因であつても何の不可思議であろう。そういう自由奔放こそが Reality である』

すなわち突如、宇宙が数千倍リアルになった。

数千倍のリアル？ 理解できるだろうか？ 倍だつて理解できない。

例えば『呼吸ができないほど純粹な空気のような、凄まじい透明さ』だ。

グスタフはそのときになって初めて夜空が剥き出しの宇宙であることに

気が附く。そのあまりの底知れなさ、甚深さ、高さ、凄絶なる巨大さに畏怖を覚える。根源的な、まるで厳肅なる大いなる神の前に立たされたときのような、誰も怯えざるを得ない、我が身も消え絶えそうな畏怖を覚える。

グスタフは震え、涙をあふれさせる。畏怖も崇高なる芸術である。ピラミッドのよう、ジッグラトのように、壮大なるもの、巨魁なるものは。

グスタフは知る、地球がボールのように回転しながら、轟音を上げて空間を劈くように飛翔していることを。身体が拡がり、それに連れて認識も広がる。

太陽系の中の地球、銀河系の中の地球、数千個の銀河がなす銀河団、1億光年以上の拡がりを持つ超大銀河団、全長13億光年以上のスローン・グ

レートウォール、直径四百億光年を超えてなお速さを増して膨張し続ける宇宙、しかしそれも一つの宇宙でしかない。宇宙の外には無数の並行宇宙がある。それらを含めれば数千兆光年かもしれない。大宇宙群世界だ。

その凄絶なまでの壮大さはあまりにも過剰なる無際限であつた。

それはまた岩の狭間の雑草や路傍の石や雨の雫から構築されて無際限に至るのである。あの圧倒的な、空想をも絶する複雑多岐細密精緻膨大繁縷無限数の壮絶さ。星辰の天穹を見上げれば無際限にも見えるその大宇宙さえも砂粒にさえならぬのである。

魂が根底から篡奪された。冷たい単体の物質から化学変化し、互いに作用する集合体たる有機的なものへ、単細胞生物へそして微生物海藻樹木無

脊椎動物昆虫甲殻類魚貝類両生類爬虫類哺乳類人類へ、彼らが今日まで連綿と累積して来た数千億年の歴史丸ごと、根こそぎ篡奪された。生存の歴史、いや、存在の歴史は「非」と言われた。上下左右前後もないと言うよりはそもそも方向方位方角がない、空間がないということ。人はそれを空想できるだろうか。

眩暈以上の眩暈だ。嘔吐感、堪えがたい気持ち悪さ、平衡感覚の狂裂、生存に耐えられない。牽き延ばされ、轢き躰られ、引き裂かれ千切られるような、感覚の破裂。かつて佛陀が言った恐るべき荒野、「生存に抛つては誰もがそこで生きることには堪えられない」

空。^{くう}

涯のない、終わりのない空間を空想できないが、空間がないことも頭
思い描くことはできない。すべてのかたちがないということ、動くための
空間がなく、時間がない。宇宙開闢以前だ。時空のない時代？

それは時代なのか？ 時間がないのに？ つまり必ずしも宇宙の開闢
は過去の出来事ではない。或る意味、現代であつてもおかしくない。いや、
未来に開闢したとしても、或る意味では。……論理的には。論理的には？
しかし論理の展開は時間性的な解釈の中を流れてはいないか。つまり最初
があつて終わりがある。それは時間そのものではないが時間性である。そ
して物象の解釈である因果は空間を想定していないか。

しかしそれが無いとは。

想像を絶し、恐怖である。根源的な恐怖である。それは又神への畏れでもある。あたかも大轟音の霹靂とともに蒼穹が崩れ落ちてくるかのような大崩壊、大崩落、大瓦解。

その怒涛の土石流のさなか、棹差すどころか、筏もなく、つかむものさえあれば藁であつても縋りつかずにいられようか、藻掻かず、足掻き捲くらずにいられようか、絶叫せずに。

既に尻を突き、失禁し、魂の凍りついた人のように眼を剥き、断末魔のような声を絞り上げる。

「ああ、ああーっ、……あわ、あわゝ、あああ、ま、まあま、マンマ、ま、……マン：あ：ま……」

グスタフは壊れた。声は絶し、埴で作った像のようだった。無意識的に立ち上がる。よろよろと石段を下り、高台から降りた様子は廃人のようであつた。時々つまずいたが、不思議と斃れなかつた。茫然とし、渺茫たる双眸。彼を囲んでいた芸術家たちはわずか数段上の場所で何が起こつたかを知らなかつたし、段上で結ばれた立体画像や音声を見ることが聴くこともできなかつたので、なぜグスタフがここまでなつたのか想像も附かず、一様に困惑し、心配そうな表情をする。むろんエフィは除く。彼女は超然とした恍惚の表情をし、一人のためにしかない芸術を創つたことへの満足によつて大きなエクスタシーを迎えようとしている。

グスタフが段を降り、歩み来ると、モーシエスを通す紅海のように芸術

家たちは割れた。魂の抜けたようなグスタフは神殿のならぶ路をふらふらと歩きながら下る。蒼き門の前に来る。雑器の碗があつた。

ぽつねんと置かれていた。

それに気が附いた彼は2秒ほどぼんやり眺めていたが、突然、何か恐ろしいものを見たかのように、その双眸は睜^{みは}られた。何かから遁れようとするかのように身を逸らし、何かを遮蔽しようとするかのように手を振り、空気を劈くような絶叫をして白眼となり、意識を喪つて崩れるように斃れた。

数人の男たちが近寄り、「おい、担架だ、担架を持って来い」と叫んだ。

エフィは勝ち誇ったように燦めく髪を翻し靡かせる。燦然として光り輝く神のようだ。

まるで大洪水が去った後のようだった。黙示録的な嵐が去った後の黎明のようであった。

不思議な沈黙が続いた。

いや、むしろ人々は黙っていたわけではない。祭典は続いていたのだ。彩色された古代ギリシアのような建築の数々はサイケデリックに花や

香で飾られ、摩訶不思議なパフォーマンスや寸劇や合唱劇、オペラ、数々のオブジェや、絵画、彫刻、演奏会、奇抜なコンセプトチュアル・アートなど百花繚亂だ。

だが劇や乱舞や音楽はスローモーションのようであった。けして遅いのではない。眼の前なのに、遠くの出来事であった。良い意味で幻想であった。正確に言えば花のような意味で幻想であった。

パレードのようだ。音のない映画を見るような華やかな行列だ。手廻し風琴のような、メリーゴーランドのような、そして生の一刹那を謳った一日は、まるで二重露出のように表面的な意味の他に別の意味を同時進行させながら終わった。象徴的な秘儀参入の一日だった。

翌日の蒼穹は世界のどこよりも素晴らしかった。海の微風はこの上なく清らさやかで優しい。白い岩の上の緑の草をそよぐ。アデールは何て美しいのだろう、キエンはそう想った。

美はすべてを肯定させる。いいえ、美がすべてへの肯定なのよ。美は肯定そのもの。太陽のような燦然たる光。神のもたらす真実。かけがえのない、生きるということ。

別れ際にアデールに言った。

「とても幸せでした」

「楽しかったわ」

「本当に。もう終わりなんて寂しいです。

哀しくて何だか可笑しい。彼は納得できたのかしら」

「グスタフのこと？ さあね。

納得なんて。ドーパミンがちよつとだけ出ればすんじやう話よ。理性的な
んてそんなものなのよ」

「彼は死を超えたと感じられたのかしら」

「あはは。死を超えた人間なら死を超えたなんて感じないわ」

中エンもくすつと笑う。そして、

「結局、何が得られたのかしらね。彼も……私たちも」

アデールが少し真顔になった。

「わからない。」

結局、私たちいろいろ考えてみたけれども、どこにも着かないで、考えの途中のまま、わからないかどうかともわからないままに終わったみたい」
風が優しく前髪を揺らし、髪が額をさわさわ撫でた。「これでお別れだね」
牛エンが言った。アデールは、

「いい経験だった。また会えるよね」

「うん。まだまだ会えるよ」

「送らなくていいの？」

「いいよ。道が違うもの」

「ふ。そうね」

キエンはバスに乗り、窓から手を振る。アデルは真つ赤なブガッテ
イ・タイプ⁵⁵カブリオレ 1932 のクランクを回す。エンジンが吼えると、
シートに乗って扉を閉めた。手にドライヴィング・グローブを嵌める。夏
の蒼穹にエグゾースト・ノートが吸い込まれた。

Epilogue. 食後の葉巻とブランデー。

『…かくして世に知られることもなく、稀少なる者のみが記憶する稀代の
偉業は果たされたのである。彼は名声も富も希わなかった。しかし欣求

は遂げられ、為すべきことは為され、もはや欲するものはなく、魂は地を離れ、天を翔ける。再び地上に甦ることはないであろう。草や霜に蔽われ、苔生す彼の墓碑銘には、このように書かれるに違いない、「独りの人間にこれ以上、何を求められるであろうか」と』

門扉のように、本は閉じられた。

しかしグスタフはいまも健在で旺盛に野心を抱き、生き馬の眼を抜くよ

うな修羅の世界で生き抜いている。彼の生活は一向に変わらない。また、エフィは偉大な総合芸術家となって名声を博し、ウォルトは新人賞を取って僅かに仕事を貰えるようになり、エイトは変わらず奇行の貧乏人で、アデルはユーラシアを旅して歌い、イタロはまたも行方不明、エリーは生きている。キエンは大学を卒業した。

完